

ポケットの中の恋人 人



神原 涼

はじめに

これは、“まり”と“あかり”という16歳の女の子の物語。

フェイクの中に真実があり 真実の中にフェイクがある

この物語は、最後まで読まないの意味がわからない。

短編のように見えるが、短編集ではない。

これを書こうと思ってから、悩んだ。

果たして理解してもらえるのか？

どう書けばいいのか？

そして、思った。

理解されなくても、これは書かなければならない、ふたりのために。

16歳の短い時間の中で芽吹いた命を、存在を書き留めておかなければならない。

ふたりは確かに生きていたとわかっているのは私だけだから。

まり-初恋

あなたから送られてくる 20個の文字で 私はしあわせになれた
カタカナだけの20個の文字で 私とあなたは恋をした
そして・・・

最初はPHSにメールが入ってきたの。
あ～、またいつものテキスト～に番号打って「メルトモニナリマセンカ？」だと思ったの。
なりませんか？って、名前もな——んにも知らない人となれると思う？
バッカみたいって全部シカトしてたんだけどね。
そのときはちょっと違ってた。

『メルトモニナリマセンカ？タカユキ16デス』

名前と歳が書いてある——！

「ど、どうしよう！ こんなのがきたんだけどお！」

いつものメル友メール？

「名前と歳が書いてるの」

へえ。

「やっぱりシカトした方がいいよね？」

おもしろいから返事したら？

「エ————？」

どうせ会わないだし、イヤになったらすぐやめればいいじゃん。

「で、でも、なんて書けばいいの？」

まりです。16です。で、いいじゃん。

「だ・・・だったら・・・やってみる・・・ あ！ そばにいて、怖いから」

わかったから、ほら！

「ほらって・・・ えっと・・・ マリデス。16デス」

ピッ 送信。

2時間経っても返信なし。

いいけどね。

そんなもんよね、こういうのって。

夕食が終って、部屋に戻ったら・・・

来てるーーーー！

「来た！ 返事が来た！ どうしよう？」

どうしようって、なんて書いてるの？

『ゴメン、サッキブカツノキュウケイチュウ』

あ、また来た。

『イマウチニカエッテルトコダヨ』

で？

「なんて返せばいい？」

何の部活とか？

「あ、そっか。ナンノブカツ？」

『ヤキュウブ』

野球部の人なのね。

で？

「なんて返せばいいの？」

ポジションとか聞けば？

「ポジション？」

ピッチャーとかキャッチャーとかそういうのだよ。

「あ、そっか。ポジションハ？」

『ショート』

ショートって・・・ どこ？ とは聞けない！ なんか野球に興味ないって思われそう、ないけど。

『マリチャンハブカツナニ？』

マリチャン？ ちゃん？ まだお互いのこと全然知らないのに、ちゃん？

えっと、とにかく・・・ 返信。

『ワタシハブカツジャナク、バレエ』

『バレー？ ポジションハ？』

ポジション？ できればプリマになりたいけど・・・ あれ？ もしかして・・・

いやいやいや、じゃなくて・・・

『バレーボールジャナクテ、ダンス』

『オドルヤツ？』

そう、そっちの方よ。

それから、ヘンな汗かきながらやり取りして少しわかったのは、

タカユキくんの家はピッチの電波が届かないから、

メールできるのは学校の休み時間とか放課後とか家まで帰るバス待ってる間だって。

『ソレジャマタネ！』

なんか・・・楽しかった。

シャワー浴びて部屋に戻って机に座って・・・え？ 着信音？

『タカユキデス』

あれ？ 家は電波届かないって言ってた・・・っていうか書いてたよね？

『デンパトドクトコマデアルイテキタ』

ウッソーー！ わざわざ？

『ナニシテタノ？』

何って・・・

『シャワーオワッテヘヤニイタヨ』

シャワーとか・・・そういうのって・・・想像させちゃう？ マズかった？

『カゼヒカナイヨウニネ』

あ・・・考えすぎちゃった。

『タカユキクンモネ』

『マリチャントハナシテルトタノシイヨ』

ホントに？

『ワタシモタノシイヨ』

『アシタモメールシテイイ？』

『ウン、マッテルネ！』

『オヤスミ』

『オヤスミナサイ』

それから毎日タカユキくんとメールするようになったの。

タカユキくんからメールが来る時間はだいたい決まっていたから、

その時間が近づくとドキドキして待っていたの。

なんか私・・・ちょっと・・・もしかして・・・

ある日、タカユキくんが、『マリッテヨンデイイ？』って聞いてきたの。

『イイヨ。タカユキッテヨンデイイ？』

『イイヨ』

そしてね・・・

『マリハスキナヒトイルノ？』

い・・・いるけど・・・

『タカユキハ？』

質問返しちゃった。

『マリガスキ』

え？

え—————！ ホントに？

『タカユキガスキ』

だってええ、ストレートに言われちゃったらストレートに言っちゃうよおお。

『オレタチ、コイビトダネ』

『ウン』

『マリ、アイシテルヨ』

いや～ん、とろけちゃうううう

『ワタシモアイシテル』

おかしいかな？

会ったこともないし顔も見たことないのに・・・

でも、好きなんだもん。

私の初恋なんだもん。

なんだかだるくて夕方にベッドの中。

眠くなってきちゃった・・・ トロトロトロ～・・・って・・・ ン？ 何の音？

電話？ 誰から？ 私の番号知ってる人なんていないわよ？

あわてて机の上のピッチとると・・・

ウッソ—————！ タカユキ!?

電話？ メールじゃなくて電話？

ムリムリムリムリムリ、電話はムリ。

切れた・・・ ホッ

なんで電話？ あ、メールしようと思って間違えて電話しちゃったのかな？

そうね、そうよ、きっとメールがくる。

・・・って、ウソ！ また電話？ 間違える？ そんなに間違える？

ムリ・・・ 電話は絶対ムリ・・・

あ、メールの着信音。

やっぱり間違えたんだ、ホッ

『マリノコエガキキタイ』

えっ？

『デンワニデテ』

でも・・・

『ワタシ、ジブンノコエキライナノ』

本当に嫌い、小さい頃から・・・

『デモキキタイ』

そんなああ・・・

どうしよう・・・ この声聞いたら・・・ 絶対に・・・

ああもうっ！ いい！ 出る！

『イイヨ』

電話が鳴った。

「もしもし」

初めて聞くタカユキの声・・・ メチャクチャ緊張してるのがわかる・・・

「もしもし・・・ まりです」

私もしてるけどね！ もうどうとでもなれ！

「なんだあ！」

え？ な、なに？

「自分の声が嫌いっていうから、どんな声かと思ったら、いい声じゃん！」

「ウッソー、なんか低くて可愛くないからイヤなの」

「そんなことないよ、自信持っていていいよ」

持てるわけない、小さい頃からのコンプレックスで、それに・・・

「バスがさ、雪で止まっちゃってさ、今、バス途中で動くの待ってたら、まりの声が聞きたくなかった」

「バスが止まったって、大丈夫なの？」

「大丈夫だよ、よくあるんだこの路線」

どんな田舎？

えっと・・・

「部活は？」

「雪で練習中止」

えっと・・・ 何を話しているのかわかんない！

「あ、バス動くって」

ホッ・・・ よかった・・・

「まり」

「なあに？」

「俺、まりの声好きだよ」

「あ・・・ うん、嬉しい、ありがとう」

「じゃ、またね」

「うん、またね」

声は・・・ 合格か。

その電話以来、タカユキはたまに電話してくるようになったの。

部活が終って、家の近くまでのバスを待ってる間にね。

私は、たま～に、絶対授業中だよねってときにメールしてみた。

『タカユキ』

『ナ～ニ？』

あ、授業中なのにピッチしてる。

先生！ タカユキくんが授業中にピッチでメールしまーす！なんてね。

『サミシイ』

『ブカツオワッタラデンワスルカラマッテテ』

『ウン』

『マリ、スキダヨ』

『ワタシモスキ』

そんなことがしあわせだった。

このピッチの中にタカユキがいるって思うと心強かった。

私はひとりぼっちじゃない、タカユキがこの中にいてくれるから。

いつ頃からだったかなあ？

タカユキからのメールや電話が少なくなってきたの。

春の大会に向けて部活の練習が遅くまでやるようになったって言ってた。

タカユキは、野球をやるために今の高校に入って、

大学も野球推薦取るのが目標だって言ってたから、部活優先でも気にならなかったけどね。

あれは・・・ 夕食後くらいだったかなあ。

タカユキからメールがきたの。

『ヘンジオクレテゴメンネ』

返事？ ああ、昨日私が送ったメールのね。

『ユミハアスドコカイクノ？』

ン？ ユミ？ ユミ・・・ 打ち間違えた・・・ ちがう・・・ これは・・・

『ワタシハ、マリダヨ』

すぐに返事はこなかった。

その意味がわかった。

『ゴメン、トモダチトマチガエタ』

『タカユキ、デンワシタイ』

また沈黙。

そして・・・ 電話の着信音。

「もしもし」

タカユキの声は・・・ やっちゃったってカンジかな？

「ねえ、好きな人できた？」

沈黙。

「本当のこと言って欲しい」

電話口からフウッて大きく息を吐く音がした。

「できた」

「メル友？」

「同じクラスの子」

同じクラス・・・ そうか・・・ そうよね、私のようなバーチャルじゃなくて、
顔も見られて、顔を見ながら話もできて・・・

手をつないだり・・・ Kissだってできる・・・

本物にはかなわない

「さよなら」

涙も出ないし、泣く気分にもならなかった。

だって知ってたから。

絶対に結ばれることはないって。

私は永久に本物にはなれないんだもの。

でもね・・・

電話と20個の文字のメールだけでも、私の心は本物だった。

会って話したからって、その人のことを本当にわかるわけじゃない。
タカユキは、私のことをわからなかった、私の真実を。
しかたないけどね。

私の初恋は終わって、もう二度と恋はできないって思った。

でも・・・

ヒロが現れた。

あれから・・・

メル友募集の掲示板があるって知って、何人かとメル友になってるけど、タカユキのときのような気持ちにはなれない。

やめちゃおうかなあ。

でも、ピッチ買い換えたばかりだし。

新しいのは長文メールも打てるやつ。

でも、私は20文字の方が楽。

メル友たちもだいたい20文字で送ってくるしね。

それに長い文章で話すことなんかないもん、顔も知らない相手となんか。

あ、着信音。

“ヒロくん”

えっと、この人は・・・ あ、広島の上の人だ。

広島って全然知らない土地っていうのがおもしろいかなって、メル友にいただけなんだけどね。

『マリサン、ナニシテルノ？』

そうなのよね、この人、マリサンって“さん”づけするの。

他のメル友は「マリちゃん」なんだけど。

まあいいけど、今は・・・ お昼か。

『オベントウタベテルヨ』

『オベントウハナニ？』

何って・・・ 20文字じゃ書ききれないから

『オニギリト、オカズイロイロ』

『イイナ～、オレ、アンパン1ッコ』

あ、そう。

あ、そうとは送れないわよね、なんて言えばいいの？

うらやましいでしょ？ それもねえ・・・ んっと・・・

『カワイソウ、ヨチヨチ』

赤ちゃんじゃないよってカンジだけど、これしか浮かばなかったんだもん。

あれ？ 秒速返信が返ってこない。

ヒロくんて返信早いし、1日何回も来るし、やり取りすると長いよね。

あ、来た。

『カンドウ！マリサンヤサシイ！！！！』

へ？ どこが？ なに？ どこがツボだったの？ ヨチヨチ？ わかんない。

『マリサン、サイコー！』

だからどこが？ まあいいけど。

このまま続けてると長くなるから

『ソロソロヒルヤスミオウルノ』

『ソウカ、サミシイ！！』

『マタネ』

『ジユクオワッタラメールスルケン』

ケン・・・ メールでも方言出るんだって思ったのがヒロくん。

てか、ヒロくんしか出てないけど。

他のメル友たちはメールでは標準語、普段は知らないけどね。

えっとね、ヒロくんの高校は授業中のピッチはダメ・・・って、どこの高校もそうだけど。

でも、ヒロくんはこっそり送ってくる時がある。

でも、授業中のときはそんなに長くやり取りしないから楽。

火・水・木が学校からすぐ塾で、塾にいる間はメールは来ないから楽。

だーって、一度始まると長いんだも〜ん。

タカユキとのときは一度に3往復くらいだったけど、始まるとずっとで、

私がテキト〜な理由つけて『マタネ』って送るまで続くんだもん。

なんかノリも軽いつていうか、頭は悪くないのはわかるの、20文字でもね。

でも、タカユキとは違う・・・

明るい人だからいちおう続けてるけど。

日曜日の夕方、本屋で本を探していたら着信音。

ヒロくんだ。

今？ まあいいけど。

『イマナニシトルノ？』

何って・・・

『ホンヤデホンサガシテル』

『マリサン、アタマイイケン』

ハ？ 本屋で本探してるだけですけど？

『アタマヨクナイヨ、フツウ』

『オレニハワカル、マリサンハアタマイイ』

何を根拠に？ まあいいけど。

『マリサンニキキタイコトガアル』

ここで？ 本選んでるんだけど？

『ナニ？』

早めに終わらせてね。

『マリサンハ、メルトモオレダケ？』

え・・・他にもいるけど・・・

『ヒロクンダケダヨ』

ウソだけど本当のような・・・だって、ヒロくんとのやり取りが長いから、他のメル友とメールする時間と気力なくなってるもん。

『マジ？ ホントニ？』

なに？ 疑ってるの？ それじゃ他にもいるけど、あなたとのやり取りが長いから、今はほとんど他のメル友とはやり取りできませんっていえばいいの？

20文字で？ ムリだしめんどくさいから

『ホント』

どうせわからないからいいや。

『スッゲーウレシイ！！』

あ、そう。

『ヒロクンハ？ ホカニモメルトモイルノ？』

いるよね。

『オレハマリサンヒトスジ！』

ウソばっか！ いいけどね、他にいても。

それにしても、ほら、なんか軽いのよね、いいけど。

そろそろ本屋から出るからって終わらせる？

『マリサン』

ええええ・・・続くのおおお？

『ナニ？』

今日は本買うのあきらめて帰ろう。

『オレハマリサンガスキ』

これは・・・どうとればいいのかなあ？ 告白？ 本屋で？

それとも軽いノリ？

『マリサンハ、オレノコトスキ?』

え・・・ それは・・・ まあ・・・ 嫌いではない・・・ から

『スキ』

Likeって意味でね。

あれ? 秒速返信が来ない。

あ! もしかしたら、何人の女の子に「スキ」って言わせられるか試してるとか?

あるかもね、勝手にしていいよ、私のはLikeだし、それに・・・ あ、来た。

『オレ、キョウネレナイ!!!』

な、なんで? 何があったの?

『ドウシテ?』 寝た方がいいと思う。

『マリサンガオレヲスキナンテユメミタイジャ』

これは・・・ 本気なのか、いつもの軽いノリなのか・・・ もうどうでもいいけど。

『マリサン』

はいはい

『ナニ?』

『オレ、ホンキデマリサンガスキデス』

なんか・・・ 好きって言われても・・・ 何も感じない・・・

『ウレシイ』

ウソついているのが・・・

『ヒロクン、ソロソロカエルネ』

ごめんね・・・

『マリサン、スピッツスキ?』

スピッツ? 犬? 犬じゃないわよね、あ、ほら、なんだっけチェリーだっけ?

歌番組で流れてるのは聴いたことあるけど・・・

『フリトスキ』

嫌いじゃないけど、すごく好きってわけでもないんだけどね。

『リサイクルキイタ?』

リサイクル? ゴミのリサイクル? なに?

『キイタコトナイ』

なんなのかもわかんない。

『スゴクイイカラ、ゼツタイキイテホシイ』

リサイクルって曲？ なんだかわかんないけど・・・

『ワカッタ、キイテミルネ』

『マリサン、ゼツタイスキニナルカラ』

その“絶対”って言う根拠はなに？ まあいいけど。

リサイクルってベストアルバムの名前だったのね。

知ってる曲も入ってるから買ってみた。

ヒロくんからメールが来たから

『リサイクルカッタヨ』

『カッテクレタノ？』

『ウン』

『マリサンガオレトオナジアルバムモッテル！』

だって、絶対聴いてほしいとか絶対好きになるって言ったのはヒロくんでしょ？

『シアワセダー！』

あ、そう。

『チョウブンメールニシテイイ？』

長文？ どれだけ長文になるのおお？

『イイヨ』

短めのにしてね・・・。

ピッチが沈黙してる。

すごーく長い文章打ってるのかなあ、勘弁してほしいよお。

あ、来た。

『マリさんへ

リサイクルの最初の曲、俺はこの曲が、俺とマリさんの曲のような気がしてる。

だから、すごく好きな曲』

そんなに長文じゃなかった。

最初の曲？ どんな歌詞？ 歌詞カードは・・・あった。

え・・・ これって・・・

別れの曲・・・

これが、ヒロくんの思う私とヒロくんの曲？

なぜ？

ヒロくんは・・・何を感じてるの？

わかってるの？

私がわかっているように・・・

まだ何も始まっていないのに・・・

それとも何も始まらないのかな・・・

『コレッテ、サヨナラッテコト？』

それならそれでいいけどね。

だとしたら、毎日あなたからのメールに慣れ始めちゃった私はどうすればいいのよ？

いいわよ、それでも。

どうせ・・・わかってる・・・私には・・・

『チガウヨ！』

何が違うの？ どう読んでも別れの言葉しか書いてないじゃない。

さよならでいいわよ、さよならするなら早い方がいいから。

『マリサン』

返事する気になんかならない。

『マリサン、オーイ！』

このまま返事しないで、さよならしようかな。

『マリサン、デンワシテイイ？』

エッ？ 電話？ なんで？ 返事しないから？

電話は・・・私の声は・・・

『ナンデ、デンワ？』

『マリサントハナシタイカラ』

『メールジャダメナノ?』

『ダメ』

ハ?

『ナンデ?』

『デンワデハナシタハウガツタワルカラ』

そ、そうかもしれないけど・・・

『ワタシ、ジブンノコエキライダカラ』

『キカセテミテヨ』

『ヤダ、ヒククテカワイクナイ』

『ソレガキキタイ』

絶対イヤ!

あっ! 電話かけてきた!

どうする? 居留守つかえない、今の今までメールしてたわけだし・・・

もうっ! どうして男子ってすぐ電話したがるのよっ!?

ああもうっ!

いいわよ! 電話して「思い出に変わって」さよならでいいわよ!

「も・・・ もしもし」

「マリさん?」

私以外なわけないでしょ。

「はい、マリです」

そのときから、ヒロくんと私は電話で話すようになった。

まり-名前

『ヒロノチャクウタ、ラルクニシタヨ』

ヒロはラルクアンシエルが好きなんだって。

私は全然興味ないけど、すぐにヒロからだってわかるようにね。

『マジ？サンキュー———！』

私のピッチの着ウタをラルクにしたって、ヒロに聞こえるわけじゃないけどね。

『ドノキョク？』

『ネオ・ユニバース』

『オレノスキナヤツ！ナンデワカッタ？』

『ワタシモスキダカラ』

本当は歌番組で見て、これしか知らないんだけどね。

『マリサンハヤサシイナ！』

優しくなんかない・・・ズルいだけ・・・

私はヒロくんのことをヒロって呼ぶようになった。

だって「ヒロクン」だと四文字打たなきゃならないから、それだけの理由なんだけど、私が、『ヒロッテヨンデイイ？』って聞いたら、すごく喜んだの。

『イイ！イイ！ウレシイ！』って。

『マリサンニ、ヒロッテヨバレルノサイコー！』って。

でもね、私のことは“マリサン”なの。

『マリッテヨンデイイヨ』って言っても、『マリサンハマリサンジャケン』って、どういう意味？

私とヒロは、ふだんは20文字のメール。

夜にメールし合っていると、途中でヒロが電話をかけてくる。

毎晩じゃないけどね、だって電話代高いもん、遠距離だし。

『イマ、ナニシテルノ？』

今？ 宿題？ 本を読んでる？ CD聴いてる？

『ヒロトメールシテル』

だってそれが本当だもん。

『マリサン、オモシロイ！』

どこが？

『ヒロハナニシテルノ？』

私とメールしてるっていうんでしょ？

『マリサンノコトカンガエテル』

考えてるっていうか、メールしてるじゃない。

『デンワシテエエ?』

『イイヨ』

ラルクの歌が流れた。

この歌詞の意味が全然わかんないのよねえ、“花のようにneo universe”ってなに？

あ、出なきゃ。

「もしもし」

「なんかあった？」

ン？ なんで？

「ううん、何もないよ、なんで？」

「すぐに出なかったから」

「ラルクの着ウタ聴いてたの」

電話の向こうで笑ってる。

「なんで笑うの？」

「マリさんがおもしろいからじゃけん」

まだ笑ってる。

「笑ってるなら切るからね」

「マリさんは可愛いなあ」

こいつ・・・ なんか最近・・・ 不意をつくこと言う・・・ ドキッとしちゃったじゃない・・・

そうなのよね、電話かけてきてもね、なんか楽しそうに鼻歌歌ってる時間が長い。

私に鼻歌聴いて欲しいの？って思っちゃうくらい。

でも、あの歌じゃないの、ヒロが「俺とマリさんの歌」って言ったあれじゃなくて、もっとアップテンポの・・・

「マリさん」

「ン？ なあに？」

「アーーー、俺、マリさんの声大好きじゃ！」

いっつもそう言うけど・・・

「マリさんの声は・・・ おとなっぽくて、可愛くて、聞いとるとホッとして・・・ 大好きじゃ」

あ そう

そしてまた鼻歌。

歌詞がよく聞き取れないのよ、なんだろ、え？ ビニ？ ビニール？ 違うなあ・・・

「マリさん」

「え？ なあに？」

「何してんの？」

何って・・・

「なんで？ 何も・・・」

「ずっと黙ってるけえ」

はあっ？

「ヒロの鼻歌聴いてたの！」

また笑った。

「マリさんと話してると楽しい」

この人の楽しさのポイントがわからない！

そうだ、ちゃんと聞こう。

「ねえ、ヒロ、どうして私のことマリって呼ばないの？ マリさんなの？」

最近・・・ ヒロにマリさんって呼ばれると、なんだか・・・

「それはマリさんは俺の中で、マリさん！って、こう、特別にしておきたいからじゃけん」

「特別ってなに？」

「特別は特別じゃ」

そう言って笑うけど・・・

「ねえ、ヒロ・・・ 正直に言ってもいい？」

え？

「ええよ」

「ヒロが私のこと、マリって呼ばないのって・・・」

何を言おうとしてるの私？

「マリさんて呼ばれると・・・」

おいおいおい、何を言うつもりなの？

「壁を作られてるのかなって」

あ————っ、何言ってるかなあっ!?

「ヒロにとって私は近い存在じゃないのかなって、遠いのかなあって・・・ 淋しくなる」

このまま電話切りたい！

「マリって名前は漢字？」

え？

「う・・・ううん、ひらがな」

「漢字の方がええなあ」

ええなあって言われても・・・

「だって、ホントにひらがなだから・・・」

「俺が漢字で名前つけてもええ？」

「ハ？」

ナニイッテルノ????

「真理のマリがええなあ」

「し、しんり？」

「まことの“ま”に、理科の“り”」

真理・・・

なんだかすごく・・・

「な？ 今からマリは漢字の真理じゃ」

そ・・・そんなこと言われても・・・

「漢字の真理は、俺がつけたんじゃけえ、俺だけのマリじゃ」

俺だけの・・・ ヒロだけのマリ・・・

ヒロは・・・ どこかでわかってたんだ・・・

私のメル友がヒロだけじゃないってこと・・・

他のメル友がマリちゃんとかマリって呼んでるだろうって・・・

だから、「マリさん」って、他の人が使わなそうな呼び名にしてたんだ・・・

なんだろう・・・ なんで涙が出てくるの・・・

「ヒロ・・・」

涙声になっちゃって・・・

「私は・・・ ヒロだけの真理だよ」

「うん」

嬉しそうにそう言って・・・ また鼻歌を歌い始めた。

まりと一緒に

あの夜から、私は他のメル友とメールしなくなった。

メル友たちも何人もメル友がいるから（そんなこと言わないけどね）、私がいなくなっても気にしないだろうし、実際メール来なくなったし。

ヒロって頭がいいなあって思う。

20文字のメールで、なんかそう思う。

他のメル友だった男子たちと違うの。

この前メールで聞いたんだよね、どこの高校に通ってるの？って。

いつもみたいに秒速で返事が返ってこなかったから、知られるのイヤなのかなって思ったの。

だから、イヤなら言わなくていいよって送ったら、「マリニハナニモカクサナイヨ」って。

その高校は県内でいちばんの大学の付属高校だったの。

「スゴイネ！」って言ったら、「オレハマグレデハイッタ」って、まぐれでそんな高校入れないよ。

「マリモシングクコウジャロ」

え・・・まあ・・・

「イチオウ・・・」

「マリハ・・・」

そのあとに書いてあったのは私の高校の名前・・・！

な、なんで？

「ナンデシッテルノ？」

「トショカンデシラベタ」

それは・・・ 図書館なら各県の高校くらい調べられると思うけど・・・

なんで私がその高校だって・・・ 何かの名簿？ ちがう、載ってるわけがない・・・ だって・・・

「マリ、デンワシテモイイ？」

え？ あ・・・

「ウン」

neo universeがかかって・・・

「もしもし」

ヒロの声が聞こえる。

「もしもし」

私がこたえる。

「マリ、怒っとる？」

「え？ なにを？」

「俺がマリの高校、勝手に調べたけえ」

「怒ってないよお！ でもね、私・・・ 理数系は全然ダメなの」

ヒコのいつもの笑い声が聞こえる。

「そっかあ、マリは理数系嫌いかあ」

嫌いとか以前に悲惨なんだってば。

「ヒコは？」

「俺はぜーんぶダメ」

そう言って笑うヒコの笑い声は・・・ いつものとはちょっと違って・・・

淋しそう・・・とかでもなくて、なんか・・・

「まあ、理数系はマリよりはマシかもしれん」

そう言って笑った声はいつもの笑い声に戻ってた。

「マリは何の科目が得意なの？」

「私は・・・ 世界史と英語くらいかなあ」

「世界史！ 俺、大嫌いじゃ！」

「なんでー？ おもしろいじゃん！」

「世界史のどこがおもしろいんじゃ？」

「だってね、あれって世界を股にかけた壮大なドラマよ？ しかも全部事実なのよ！」

「世界史をそんなふうを考えるって、初めて聞いた」

「だーってね、たとえば当時の人口が100万として、その中で、ううん、

たとえば、アレクサンダー大王とかマリー・アントワネットとか、

まさか21世紀の日本の教科書に自分の名前が載ってるなんて想像もしなかったと思う」

あ・・・ 世界史のこととなると、つい熱く語ってしまうのよね・・・

ほら、多分ヒコはつまらないって思ってるわよね、いいわよべつに。

「俺・・・ マリに世界史教えてもらったら好きになったかもしれん」

え？ ホント？ いやいやいや

「いいよ、ムリしなくて」

「マジマジ！ 今のおもしろかったけえ」

そう？ まあ楽しんでもらえて嬉しいけど。

「マリ」

その声は急にヒソヒソ声になってた。

「ちょっと待ってて」

ヒコがヒソヒソ声だから、私まで「ウン」ってヒソヒソ声になっちゃった。

なんかゴソツて音がして、おとなの女の人の声がかぐもって聞こえる。

ああ！ おかあさんが来たんだ！ それでピッチを枕の間に隠したんだ。

ハッキリとは聞こえないんだけど・・・

おかあさんが、「いつまで電話してるの？」みたいなことを言ってる・・・

どこの家の母親も同じなんだなあ、フッフ

ヒロのしゃべり方がつっけんどんで、イライラしてる・・・

なるほどねえ、男子って、こうやって親に隠れてカノジョと電話してるんだあ、フフッ

「わーっかったから早く出てけよ！」みたいな、そんなことおかあさんに言っちゃダメですよお。

・・・と思いながら、私も息をひそめて音を立てないようにしてるけど。

ガサゴソって音がして・・・

「マリ？」

「はい」

「ごめんな、急に母親入ってきたから」

「なんかおもしろかった」

「何が？」

「ヒロとおかあさんの会話」

「どこがおもしろいんじゃ！ 急に入ってきてムカツクけえ！」

「でもね・・・」

「なに？」

「ううん、やっぱりいい」

「なにい？ 言うてえな！」

「恥ずかしいから言わない」

「恥ずかしくないで！ 言うてえな！」

「それじゃ・・・ 言うけどお・・・」

「うん、言うて」

「ヒロとヒロのおかあさんが話してる時、私・・・ なんかまるで・・・ やっぱり言えない！」

「マリ～、言うてえや」

「じゃ、メールで言うよ」

「今言うてえや、マリの声で聞きたいけえ」

そうだね・・・ 今しか言う時はもうないかもしれない・・・

「ヒロとヒロのおかあさんが話してる間・・・ なんか私・・・

ヒロのベッドの中に隠れてジーッとしてたような気持ちだったの」

あ 沈黙。

だから言いたくなかつ

「マリー———！ 可愛い！ どうすりゃええんじゃくらい可愛いけえ！」

そ、そこまでのこと言った？

「ホントにマリがここにおったらええのんになあ」

「いるじゃん」

「ン？」

「ヒロのピッチの中に、私はいつもヒロの傍にいるじゃん」

え？ また沈黙？ なんで？ やっぱりヘンなこと言った？

でも、本当にそう思ったから・・・

「マリー———！ 大好きじゃけえ———！」

どうしてそこに飛んだのかはわかんないけど・・・

「俺はマリのそういうところがたまらん！ 可愛くてたまらん！」

え・・・なんか・・・照れちゃうんですけどお・・・

でもね・・・

本当にそう思うの・・・

私は物理的にヒロの傍にいれないけど・・・

ヒロのピッチの中に私が入って、私のピッチの中にはいつもヒロが入ってくれて・・・

「私はヒロの“ポケットの中の恋人”だよ」

あっ 恋人って言っちゃった・・・

「ちがう」

だ、だよな・・・

「ポケットの中だけじゃない、俺はいつもマリのことばーっか考えとる。

ちゃんとした恋人じゃ」

でも・・・

「私とヒロは・・・ 顔も見たことないし、手もつないだことないし・・・ できないし・・・

」

「そんなんどうでもええけえ、好きじゃったらそれでええじゃろ？」

なんか・・・ なんでなのか・・・ 心が・・・ 溶けていく・・・ 氷が溶けるみたいに・・・

「一生・・・ 会えなくても？」

「そんな先のことなんか知らん、俺は今マリと一緒にいられてシアワセじゃけえ、
マリのこと大好きだから、マリのこと、とっても大切じゃから、マリは俺の恋人じゃ」

そんなこと言ったら・・・ そんなこと言われたら・・・ 私・・・

「ヒロ～・・・ ウェ～ン・・・」

子どもみたいな泣き方になっちゃってるけど止まらないんだも～ん。

「マリ、泣かんでえ、泣いてるマリも可愛いけど、へへへ」

可愛いって・・・

「フェ～ン・・・」

「マリ、大好き！」

「私も・・・ヒロがあ・・・ヒック・・・大好きいい・・・ウェ～ン・・・」

私が泣き止むまで、ヒロはしあわせそうな優しい声で小さく笑ってた。

「泣いたら疲れちゃったから寝るね」って言ったら「うん」って。

電話を切って、ベッドに横になった。

ピッチは枕元に置いた。

あれ？ ヒロからメール？

『マリ、オヤスミ』

ヒロ・・・

『ヒロ、オヤスミ』

『マリハオレノトナリニイルヨ』

私は自然に微笑んでいて・・・

『ヒロモワタシノトリニイルヨ』

『フタリデイッショニネテルネ』

『ウン、ソウダネ』

最後のオヤスミを言い合って・・・

私とヒロは一緒に眠った。

まり-鼻歌

日曜日だけど、ヒロは午前中に塾の特別講習があるって言った。

今・・・ 一時半くらい・・・ 微妙・・・

塾の友だちとお昼食べてるかもしれないし・・・

でも・・・ なんとなく・・・

『ヒロ』

あ、返信。

『ナニ？ ドウシタノ？』

どうもしないけど

『ヨンデミタダケ』

呼んでみただけっていうのもひどいけど、ホントだから。

『カワイイ！！！！』

ヒロが可愛って思うポイントが今もよくわかんない。

『マリ』

呼んでみただけって言うんでしょ？

『ナ～ニ？』

送られてきたのは・・・



20個のハート。

なんだか衝撃的、衝撃的っていうより・・・ 感動でもなくて、感動とか超えて・・・

ヒロってすごい！

20個っていう文字制限は、そうよね、文字だけじゃなくていいのよね。

ハートとか絵文字とかは語尾の最後につけたりするけど、

20個全部をハートで埋め尽くすって・・・ こんな言葉使いたくないけど、目からウロコ！

私の反応おかしいかな？ ホントはいっぱいハート送ってもらってうれしい～♪って・・・

でも、そんなんじゃないんだもん、すごいって、ヒロの発想力がすごいって、

そっちに感動しちゃってる。

『マリモオレニハートチョウダイ！』

あなたみたいな発想はできないっていうか越えられないよ。

『20コダケジャタリナイカラアゲナイ！』

そんなことはホントはどうでもいいんだけどね。

『1ッコデエエケエ！』

1個だけでいいの？

だったらね・・・



あれ？ 秒速の返信が来ないよ？

さすがにキスマークはやり過ぎたかなあ？

私だって初めて使ったんだけどね。

ごめん、ウソ、冗談って書く？

あ、来た。

『マリ・・・』

なに？ 怒ってる？ あきれてる？ なに？

『トロケタ』

ホントにキスしたわけじゃないのに？ ただの絵文字だよ？

『オレ、モウマリイガイカンガエラレン』

それは・・・

えっと・・・ 話を替えよう。

『ヒロ、イマドコニイルノ？』

『ウチニカエッテルトチュウ』

『アルイテルノ？』

『チャリ』

チャリ・・・ 自転車か・・・

『ワタシ、ジテンシャノレナイノ』

『マジ？』

『ウン』

『ナンデ？』

それは・・・

『パパガアブナイカラダメッテ』

信じられないかもしれないけど、ホントなの。

小学生のときに、お年玉で自転車買おうとしたらすっごく怒られて・・・

それで乗れなくなっちゃったんだよね。

『オレガノセテヤル』

え？

『マリヲオレノウシロニノセテヤル』

ヒロの自転車の後ろに私が乗って、ヒロの腰に手を回して・・・
そんな日は絶対来ないけど・・・
頭の中でなら、乗ってもいいよね。

ヒロは、もうすぐ家に着くから、部屋に戻ったらまたメールするって言った。

それから・・・ 3時間？ 4時間？ まだヒロからメールが来ない。

お風呂？ 夕食？ わかんない。

そうだ！ いつも電話でヒロが歌ってる鼻歌、あれって何て曲かな？

“ビニ”っていうのは聞き取れるんだけど・・・

もしかしたら、「リサイクル」の中にあるかな？

あのアルバム、買ってから一度も聴いてないんだよね。

最初の曲の歌詞が「俺とマリさんの曲」って言われてから、なんかなあって。

まずは歌詞カードで探してみる？ “ビニ”なんて歌詞あるかなあ。

これもちがう・・・これにもない・・・ あれ？ この11番目の・・・ ある！

「コンビニ」！ ビニってコンビニのビニだったんだ！

鼻歌だからよくわからないんだよね。

ちょっと聴いてみよう。

ああああ！ これだ！

「運命の人」

私、こっちの方がいい、ヒロと私の曲。

歌詞だって、なんだか合ってる。

それに、ヒロがいつも歌ってる曲だから。

好きなんだよね、ヒロの鼻歌。

最初は、なんで鼻歌ばかり歌ってるの？って思ったけど、今は好き。

もちろん話もするけど、私と電話してるときに鼻歌歌ってるヒロは、

なんていうのかな、まるで同じ部屋に一緒にいるみたいなカンジで、

私とピッチでつながっているのが嬉しいってカンジで、

二人の間の空気を楽しんでるみたいで・・・

あ、ヒロからメール。

『オソクナッテゴメンナ』

いいけど・・・

『ナニカアッタノ？』

『ナンモナイヨ』

ないわけない・・・

『ナニカアッタヨネ』

ヒロが理由もなくこんなに長い時間私のこと放っておくなんてなかったもの。

秒速返信が来ない。

『イイタクナカッタライイヨ』

深入りはしないから安心して。

ヒロの現実に関心深く入り込む権利はないから。

話題変えよう。

『ヒロガイツモウタッテルキョクワカッタヨ』

『オレガウタッテル？』

『イツモハナウタウタッテルジャン』

『マジデ？』

え————っ？ 無意識だったのおおお？

『ウタッテルヨ、ウンメイノヒト』

その歌が好きって続けて打とうとしたら・・・

『マリ、フロハイッテクル』

あ・・・

『ウン、オヤスミ』

なんだか・・・

『マダオヤスミジャナイヨ』

え？

『アガッたら、メールスル』

『ウン』

なんだか・・・

いつものヒロとちがう・・・

20文字のメールだけでもわかる・・・

まり-少しずつ

『マリ、オキテル？』

ヒロからまたメールが来たのは一時間後。

『オキテルヨ』

私は・・・

さっきのヒロが私の知ってるヒロじゃない気がして・・・

あたりまえなんだけど。

本当のヒロなんて全然知らないんだなって・・・

あたりまえだけだね。

メル友なんてゲームと同じ、楽しむだけの存在。

現実はすべて隠して、現実逃避するためだけの相手・・・

20文字で恋なんかできない、「恋愛ごっこ」で楽しんでもらうだけで・・・

なんかシラ～ッとしてきちゃった。

どうでもいいや、ヒロに何が起きたかなんて。

私には関係ないし。

『オヤジトケンカシタ』

ハ？

おとうさんとケンカ・・・ まあ・・・ そういうこともあるよね、高校生の男子なんだし。
で？

これに何て返信すればいいの？

あ、そう・・・しか浮かばないけど、あ、そうって言っても・・・ねえ。

これは・・・

『ソレジャ、チダラケニナッタ？』

茶化すしかないもん。

『ハハハ！イマノ、マジデワラッタ！』

よかったね。

『チョットマッテテ』

また？ また待つなの？ 何を？

もういいよ、寝ようよ、今日のことはなかったことにして、またいつもの軽いメールでいいよ。

あ・・・ 長文メール。

『今日、塾で進路相談があって・・・』

進路相談！ だよ、高校生だもん。

『俺が入りたい大学は合格圏内だけど、親父はどうしても広大に入れって』

広大？ あ、広島大ってことね。

『俺、兄貴がいて』

そうだったの？

そんな話とかしたことがなかったから知らなかった。

『兄貴は頭がよくて、付属高校でもトップクラスで広大もイッパツで入った』

へえ、広大ってどれくらいのレベルなのかわからないけど、

県の名前がついてるからトップクラスの大学だよ。

『俺は兄貴みたいに頭よくないけん、今の高校だってギリで合格して、成績も中くらいで』

付属で中くらいなら頭いい方だと思うよ？

『俺は広大に入りたくない、東京の大学に行きたいんだけど、親父は絶対ダメだって』

これって・・・ 私が知っていいことなのかな・・・

それに・・・ なんだか・・・ 似てる・・・

『高校も大学も親父の母校で、そこじゃないと許さないってさ』

それって・・・

『それでケンカした』

私・・・

『ゴメンな、真理に心配かけたけ』

ヒロの中での私は、やっぱりずっと「真理」なんだね。

“俺だけの真理じゃ”

その私は・・・ 私も・・・

『ヒロ、信じてもらえないかもしれないけど』

このことを・・・ 書いていいのかな・・・ 書いたら・・・

『うちも同じなの。父親の決めた高校で。小学生の頃、車で連れていかれて、

ここがおまえの入る高校だって。中学のときも、あの高校に入れなきゃ人間じゃない、

そんな感じでずっと・・・』

ずっと・・・ それは・・・

『だから、ヒロの気持ちがわかる』

そして、その先のことも・・・

送信。

書かなきゃよかったかな・・・ もっと軽いカンジで、そうなんだあくらいで・・・

でも、それは真実で・・・ 真実だから、書かない方がよかったのかも・・・

どうしよう・・・ だけど、ヒロが今どんな気持ちでいるのかが痛いほどわかって・・・

『ヒロ、デンワシテイイ？』

私から電話するなんて初めてだけど・・・

『オレ、イツモミタイニハナセンケ』

そんなのわかってる

『ダメッテ、ハナウタウタッテテイイヨ』

『ハハハ！』

ヒロが本当に笑ったのかどうかはわからない・・・

電話が鳴った！

私の声が・・・ 私の声でありますように！

「もしもし、マリだよ」

私の声だ・・・。

「ヒロだよ、ハハハ」

ヒロの声はいつもよりちょっと低くて・・・

「よかったあ！ 寝る前にヒロの声聞かないと寝れなくなっちゃってるんだもん」

心とは違うこと言ってる私がいる・・・

「あ、ちがう！ ヒロの鼻歌聴かないと寝れないんだった」

まるで、さっきのやり取りがなかったような声出してる・・・

「バスの～揺れ方で人生の意味が～」

なに歌ったりしてるの私？

「マリ、その歌覚えてん？」

「覚えてよ、だって、いつもヒロが鼻歌で聞かせるから」

「ハハハ」

笑い声が・・・ 聞いてると辛い・・・

「私、この歌好きだよ」

歌の話なんかしてる気分じゃないのはわかってる、だけどこれしか・・・

「マリ、さっきメールしてきたことってホント？」

ヒロ・・・ あなたの方が私よりずっと素直だね・・・

「ホント」

「そっかあ・・・ だからか・・・」

だから・・・ なに？

「電話してるとき、マリがときどき悲しそうなきがあるけえ」

え？

「マリがなんも言わんけ、俺、どうしたって聞かん方がええんかなあって思ってた」

そんなこと・・・ 感じてたの？

そんなこと感じてたなんて全然わからなかった・・・

私の心の奥にある本当の感情を感じてくれる人がいた・・・

それがヒロだったなんて・・・

「マリもお父さんといろいろあるんじゃないかあ」

あるけど・・・ あったけど・・・

私ノ悲シミハ別ノ意味ガアルノ・・・

「なんで言わなかった？」

「なにを？」

「マリがお父さんのことで悩んでるって」

だってそれはもう・・・

「父親のことなんか話したくもないよ！ 靴下触るのもイヤだもん！」

「ハハハ！」

少し・・・ いつもの笑い声に戻ってる・・・

「そんじゃ俺のは？」

「臭くないなら触ってあげてもいいよ」

「ヤッベ！ 臭っせえわ」

「ぜーっっったい触らない！ 一生触らない！」

「わかった！ 今度からマリと電話するときは必ず新しい靴下履いとくけ」

「そんなに靴下触ってほしいの？」

「マリ、まじめに言うけえ、ちゃんと聞いてくれ」

え？

「な・・・なに？」

「今度からは、なんでも俺に言うてくれ」

「なんで・・・も？」

「辛いときとか、イヤなことあったら、隠さんで言ってくれよ」

隠さないで・・・

「俺、なんかわかるんじゃ、マリが、なんかムリしてる時とか」

ムリって・・・

今こうしていることにムリがあるのよ。

私が私であることにムリがあるのよ。

私は私なのに私でいられないことにムリがあるのよ。

「俺、マリのことなら、なんかわかるけえ」

なにを？ 私のなにを？

私はもっとわかる、あなたが今どんな気持ちなのか、あなたよりわかっている。

「ヒロ」

「ン？」

「ヒロは・・・ 本読むの好き？」

「すごく好きってわけじゃないけど嫌いじゃないよ、なんで？」

「小説は？」

「小説？ 誰の？」

それを言ったら・・・

「私の」

「マリの？ どういうこと？」

「私ね・・・ 物語書いたことあるの・・・ 文芸部の人が印刷所おしえてくれて」

もう・・・ 戻れない・・・ ここまで言ってしまったら・・・

「コピーに毛が生えたみたいなのだけど、本みたいにしたいの」

「読みたい！」

「ほ、本気で言ってる？」

「マリの書いた本読みたい！」

「で、でも、そんなにうまくはないよ？」

「送って！」

「ハ？」

「住所言うけん」

「あ、ちょ、ちょっと待って」

メモ帳と・・・ ボールペン出して・・・ 本気？

「い、いいよ」

ヒロがゆっくりと住所を言った。

ホントに広島だ・・・ 何に感心してるの私？

「すぐ読みたい」

「う、うん、すぐ送る」

「マリが小説書くなんて知らなかったけえ」

「言っていないもん」

「なんで言わなかった？」

「恥ずかしいもん」

「恥ずかしいことないけえ、小説かけるなんてすごいけえ」

「すごくないよ、ただ好きなだけで」

「マリはふつうの子と違うと思ってた」

え？

「なんか違うんじゃない、メールだけでも、なんちゅうか、将棋みたいじゃない」

「将棋？ 私、将棋なんてやったことないよ？」

「ハハハ、ホンモンの将棋じゃのうて、先の先の手でくるっちゅうか」

「ン？ なに？？？」

「こっちが思ってるのんと違う返事がポンと来て、いっつもすごいなって思っったけ」
そんなこと思ってメールやり取りしてたの？

「ふつうの16歳の女の子と思えん」

え・・・

「マリはサイコーじゃけん」

「私は・・・ね・・・」

「ン？」

私は・・・

「ヒロの広島弁が好き」

「ほらな！」

「なにが、ほらな？」

「思ってもない方向から突然来るけえ」

「だって本当に好きなんだもん」

「マジで？」

「うん、できれば・・・ ずっと聞いていたい」

「いつでも聞かせてあげるよ」

ヒロはわざと標準語で言った・・・けど、イントネーションは広島弁だよ。

ヒロが鼻歌を歌い始めた。

“でもさ 君は運命の人だから・・・”

その運命がどんな運命か・・・ 私はもう知っている。

(c)運命の人:作詞、作曲／草野正宗

“TINKER”

スカイブルーの表紙の本・・・みたいなもの。

短大生の女の子の物語。

外側は「お金持ちのお嬢様」で、まわりからは「恵まれすぎている」と言われている。

「恵まれすぎているから、しあわせなのがわからないのよ」と。

そして、しあわせだと感じない自分を責め続けている。

主人公リンは、厳しい母親に抑圧されて生きてきた。

「98点取っても、取らなかった2点を責められる」

何から何まで母親の言葉にがんじがらめにされて、自分の感覚すらわからなくなっていた。

自分の居場所はどこにもない・・・

そんなとき、シンジという青年と出会って、まあいろいろあって、

1ヵ月の期限付きでシンジの部屋に住むことになる。

シンジと暮らしているうちに、自分がいた世界が「歪んだ世界」なのだと気づく。

「真っ直ぐな世界は、こんなにもシンプルで暖かい」と。

簡単に言えば、「言葉の虐待」を受け続けて生きてきた子の話。

これをヒロが読んだら、なんて思うかな？

つまらない？ 興味ない？ わけがわからない？

なんでヒロに送ろうなんて思っちゃったんだろう？

送るって言っちゃったし。

前書きと後書きのところをカッターで切り取った。

ここは・・・ “あの人”のことが書いてあるから。

私とは関係ないあの女の人。

隠したいんでしょ？

ヒロには「パパの名前で送るね」って言うておいた。

だって私の名前で荷物が届いたら、きっとヒロのお父さんやお母さんが・・・ね。

パパの名前じゃないけどね、この人は私のパパなんかじゃない。

送って2日後に「トヨタヨ！」ってメールが来た。

届いちゃったあ・・・

「ヨンダラ、メールスル」

ああ、ドキドキする・・・ 吐きそう・・・
んも――っ、いい！
なんて思われてもいい！ それでバイバイでもいい！
寝る！

ン・・・ neo universe・・・ ヒロから・・・ え？ 電話？ メールじゃなくて電話？
えええええ、直にいい？
フーッて大きく息を吐いて・・・
「も・・・し・・・もし」
「これってホントにマリが書いたの？」
ハ？
「うん」
「ホントに？」
「ホントだよ、なんで？」
何かヘンなこと書いてあった？ マズイこと書いてたっけ？
「この、リンの、感じてることや考えてることが・・・」
な、なに？
「俺がいつも考えてることとまったく一緒なんじゃ」
え？
「言葉まで一緒なんじゃ」

私は・・・ 爆風を浴びたような感覚になった。
私の感覚とまったく同じ感覚を持って生きている人がいた・・・
それが・・・ ヒロ。

「俺・・・ 読みながら泣いた」
な、泣いた？
「わかり過ぎて、リンの、マリの心が俺とまったく同じじゃったけ。
俺とここまで言葉までおなじこと考えてる人に初めて出会った」

それは・・・ 私も・・・
驚いてる、今、私、本当に驚いてる・・・

「ひとつ聞きたいんじゃないけど」
え？
「な、なに？」

「なんで主人公は短大生なの？」

「ど、どういう意味？」

「高校生じゃのうて、なんで短大生？」

だってそれは・・・

「高校生だと、1ヵ月知らない男の人のところで暮らすってできないから・・・」

「あ、そっか！」

なんでそんなこと聞くの？ ただの物語だよ・・・

「マリはなんでこんなに短大の寮のこと知っとるの？」

だからそれは・・・

「従姉が短大の寮にいたから」

「そっかあ」

もうなんにも聞かないでよ・・・

「マリ」

「は、はい？」

「ありがとな」

「な、なにが？」

「マリの大切な物語読ませてくれて」

だって、それは・・・

「ヒロにわかってほしかったから、私がヒロの気持ちわかるって、ホントだって」

それは本当のことで・・・

「うん、すごくわかる」

なんだろう・・・

ヒロと、すごく近くなって・・・ すごく遠くなったような気がする・・・

心の中を覗かせてしまったみたいで・・・

そこには見て欲しくないこともあって・・・

それをずっと隠していられるのか不安になってきて・・・

それから1週間くらいかな？

とにかく、1週間くらい経ったある日、いつもより早い時間にメールが来た。

学校終わったばかり？ まだじゃないの？

『マリノバンゴウ、トモダチニオシエテイイ？』

え？ 私の番号？ 友だちに？ なんで？

『ナンデ？』

『トモダチガ、マリニタノミガアルッテ』
私に頼み？ ヒロの友だちが？ なに？ わけわかんない。
『タノミッテ、ナニ？』
ヒロが言ってくればばいいじゃん。
なんでわざわざ友だちに私の番号おしえるの？
『デンワシタラ、スグサクジョサセルカラ』
『ダカラ、ナニ？ ドンナコト？』
『オネガイ！』
あ——、も——、メンドクサイッ！
『イイヨ』
本当はよくない。
何も理由をおしえてくれないで、なんなの？

1分くらいして、電話が鳴った。
知らない番号
ヒロの友だち・・・だよな。

「も・・・ もしもし」
「マリさんですか？」
「はい」
「はじめまして。俺はヒロカズの友人でヤマシタっていいます」
「はじめまして」
ナンデコノ人ト話シテルノカ ワカラナイ・・・
「マリさんが書いた本、読みたいんですけど、いいですか？」
え？ 私の本で・・・ “TINKER”？
「あれは・・・ ヒロにあげたので・・・ ヒロがいいって言うなら、私はそれでいいです」
ヒロは・・・ この人に、私の本の話をしたの？
「ヒロカズが、これはマリさんの本だから、マリさんに直接聞いて、
読んでもいいって言ったら貸すっていうんです」
ハ？ なんでそんなまわりくどいことするの？
「あの、あれは、ヒロにあげたので、ヒロがいいなら、私もいいです」
「読んでもいいってことですか？」
「はあ・・・ あの・・・ ヒロがいいなら、いいです」
「読んでいいんですね？」
いいわよっもうっ！
「はい」
「ありがとうございます！ 大事に読みます！」

どう読んでもいいわよ！

「失礼します！」

切れた。

なんなのこれ？ なんなの？

ヒロが私のこと試したの？

他の男子にあの本を簡単に貸すかどうか？

それがイヤなら私の本の話なんかしなきゃいいじゃない！

その夜は、ヒロからメールも電話もなかった。

なんで？

私が他の子に読んでもいいって言ったから怒ってるの？

だったら何が正解だったの？

あれはヒロにだけしか読ませませんって言えばよかったの？

あの本の話を読みにしたのはヒロでしょ？

それで、友だちが読みたいって言ったわけでしょ？

イヤならイヤって自分で言えばいいでしょ！

もういい！ どうでもいい！ めんどくさい！

あれから、ヒロにどう接していいのかわからなくなってる。

ヒロは私にどうしてほしいのかな。

今までみたいに軽いノリでメールできなくなっちゃった。

だって、ヒロの心の中の傷を知ってしまったから、知らないふりができないよ。

前みたいに「呼んでみただけ」なんて軽いメールができないよ。

何も考えずに20個の文字を並べられなくなっちゃった。

ヒロも同じなのかな？

私の心の傷痕を知ってしまったから・・・

“まったく一緒なんじゃ”

“言葉まで一緒なんじゃ”

一緒じゃない、同じじゃない、私は物語の先を知っている。

ヒロはまだその中にいる。

結末は自分で体験しないとわからないっていうこともわかってるから。

だから何も言えなくなって・・・

『マリ、イマナニシテルノ？』

ヒロに言いたいことがたくさんありすぎて・・・

『ヒロノコトカンガエテタヨ』

でも、それしか言えなくて・・・

『マジ？ ウレシイ！！！！』

ウソつき。

ホントは知ってるくせに、私が考えているのはそんな軽いことじゃないって。

期末試験が近づいていて、ヒロの塾も勉強も大変になってるって知ってるから、私はあまりメールしないようにしてる。

だって、この前も大学のことでお父さんとぶつかったってチラッとだけ言ってたから。

「俺は広大に入れる頭ないけえ、そいでも入れって、ムリじゃって！」

そう言って笑ったけど、それ以上そのことには触れなかったけど、触れなかったから、

私に話してくれないから、私も、「どうしよう、数学落とすかも～」なんて言って、

そういうことがね、そういうのがホントに言いたいことじゃないって、

ヒロも私もわかっちゃうから、言葉を交換してても、心の奥の方は沈黙してる。

同じものを持つと遠くなるの？

平日の夜は、少しだけしかメールできない。

だって次の日の課題とか宿題とか試験勉強で大変だから、だと思っ、言わないけど。
でも、ちょっとだけメールしたくなる。

『ヒロ』

『ナ～ニ？』

『ナニシテルノ？』

『ベンキョウ』

だよ、メールなんてしてごめんね・・・

がんばってねとか言って切ろう。

『マリハ、ナニシテルノ？』

いいのに、ムリして返信しなくても・・・って思っちゃう。

『スウガク』

ウソだけど・・・

『ワタシガ、オトサナイヨウニイノツテネ』

『ハハハ！ワカッタ、イノツテル！』

『ヒロ、オヤスミ』

『マリ、オヤスミ』

虚しい会話。

言いたいことなんてひとつも言えない無意味な会話。

ヒロが私のことをどう思っているのか、今はもう全然わからない。

好きなのか、それとも、傷を見られちゃったからうっとおしいのか・・・

聞きたいけど聞けない。

ホントのこと言ってくれるかどうかもわからないから。

金曜日の夜。

今日はずっと具合が悪くてベッドの中。

具合が悪いとね、淋しくなる、ひとりぼっちのような気分になる。

みんなの時間は進んでいて、私の時間だけが止まっているような感覚になる。

ヒロにメールしたい。

もう11時だけど、こんな時間にメールしたことないけど、出ないかもしれないけど。

『ヒロ』

“呼んでみただけ”じゃないよ・・・

『マリ、ドウシタノ？』

って、そりゃ聞くよね、こんな時間にメールだもん。

『モウネテタ？ オコシタラゴメンネ』

『ネテナイヨ、トモダチトデカケテル』

え？ こんな時間に？

『ミンナデ、ヤマニイクトコロ』

ヤマ？ 山？

『トザン？』

『ハハハ、オカミタイナトコロ』

そっか・・・ なんかちょっとホッとしてる、ヒロが友だちと息抜きしてるから。

『ワカッタ、ジャ～ネ』

たまには友だちと遊びたいよね、邪魔しないから、私、邪魔になりたくないから。

『マリ、ナニカアッタノ？』

え・・・

『ナニモナイヨ』

『マリ、ホントノコトイッテ』

ホントのこと・・・

ホントは・・・

『ヒロ、サミシイ』

淋しいの、すごく、淋しい

友だちと出かけてるときに、こんなこと言われても困るのはわかってるけど、

私は絶対にヒロのそばにいることも、一緒に出かけることなんかできないし・・・

『マリニハ、オレガイルヨ』

文字ならそんなこと言えるよね。

『マリノソバニイルヨ』

いないよ、わかってるでしょ、私たち一緒になんかいられないって！

『イツモイッショニイルヨ』

その言葉がもっと私のこと淋しくさせるってわかる？

できないこと言われてるんだよ。

『アリガトウ、ジャ～ネ！』

『ウン、マタネ』

ピッチを枕元に投げて、ベッドにドスンと寝転がって、窓の外を見た。

真っ暗。

色のない世界。

私のいる世界。

アップテンポの音で目が覚めた。

え、なに、え、ヒロ？ メール？ 今何時？ 12時ちょっと過ぎ・・・ なんで？

『ネテル？』

寝てたけど・・・

『オキテルヨ』

なに？ どうしたの？

『イマ、オカニツイタヨ』

ああ・・・

『ホシガイッパイデ、キレイダヨ』

少しはヒロの気晴らしになったのかな・・・ だったらよかった・・・

『ワタシモ、ミタカッタナ』

見れるわけないのは知ってるけど・・・

『マリモミテルヨ』

え？

『オレトイッショニミテルヨ』

『マリニモミセタカッタカラ、メールシタ』

え・・・

『イツモイッショニイルカラ』

ヒロは・・・ ヒロには・・・ わかったんだ・・・

私が淋しいって、本当に淋しいって、それがどんな気持ちかって・・・

「いつも一緒にいる」って言葉はウソじゃないって・・・

『ヒロ、ワタシ、ナイトルノ』

『ドウシテ？』

『ヒロガヤサシイカラ』

あなたが、私が言葉にできない心をわかってくれるから・・・

『マリ、アイシテルヨ』

愛してるって・・・ 初めてだね。

『ワタシモ、アイシテル』

こんなに私のことを思っていてくれてたのに・・・

私はあなたを・・・ あなたの心がわからないなんて・・・

そんなこと思ってた・・・ ごめんね。

『ヒロ、アリガトウ、オヤスミ』

『マリ、オヤスミ』

ヒロはわかってた。

ずっと私が本当のこと言えなかったのを。

“マリがなんも言わないけえ、聞かない方がええんかなあって・・・”

ヒロは、いつもわかってたじゃない、私が黙っている方の言葉を。

布団をかぶって泣いた。

傷痕が疼いた。

もう何も感じないと思っていたのに、ヒロの優しい手に触れられて。

あの夜から・・・

ヒロが“私に星を見せてくれた”夜から、なんだか逆にいろいろ考えちゃうようになって、ますます気軽にメールできなくなっちゃてる。

私のこと、あんなに大切に思ってくれているってわかったのに、わかったからかなあ？

それに、ヒロの現実も抱えているものもわかってしまった今は、

なんだか私らしくメールできなくなっちゃった。

ヒロから電話も来なくなった。

メールだけ。

最初の頃はあんなにウザイくらい送ってきたのに、今は一日に一回やり取りするだけ。

ヒロも、私とどう接していいのかわからなくなってるのかな。

私の“傷痕”を知ってしまったから？

“ヒロの真理”は、明るくて好きなときに好きなこと言って、きっとヒロはそんなマリが好きで、でも、今の私は正直ヒロにどう接していいのかわからなくなってる。

何も知らなかった方がよかったのかも。

お互い“現実”のことなんか知らなければ、メールや電話してるときは、バカなこと言ったり、20文字で遊べたのかもしれない。

『マリ、ナニシテルノ？』

何って・・・

『タイクツシテル』

『ハハハ、イイナ、オレモタイクツシタイ』

イヤミ？って、そんなこと思っちゃう私って・・・

『イッシヨニタイクツシヨウヨ』

『イマカラ、ジユク』

ほら、現実が入ってくる

『スゴクタイクツデキルネ！』

『ハハハ、ソウダネ』

本当は退屈してるヒマなんかなくらい真剣に勉強するってわかっちゃう

『ヒロ、ワタシノコトスキ？』

わからなくなってるの・・・ いろいろ・・・ いろんなこと・・・

『ナンデソンナコトキクノ？』

前のヒロなら、そんな質問しなかったよね

『キキタカッタダケ』

送られてきた20個のハートは・・・

ただの絵文字の羅列に見える。

20回ハートを押しただけみたいに。

『カエッタラ、メールスルヨ』

『ウン、マッテルネ』

『マリ、オレノコトスキ？』

わからなくなっちゃってる・・・ ヒロのこと本当に好きなのか・・・

ハートを20回押して送信。

何て言っているのかわからなかったから。

その夜は、ヒロからメールが来なかった。

次の日も、その次の日も。

ピッチの中の1日は現実の1週間くらいの感覚。

2日もメールがないと、2週間会わない感覚になる。

なんで？ どうしてメールしてくれないの？

私のこと嫌いになったの？

だったらハッキリ言ってよ。

宙ぶらりんのままにしておかないでよ。

今日は塾はない日だから、もう学校はとっくに終わってる。

今ならメールしたら返信してくれるかな？

『ヒロ、イマナニシテルノ？』

5分経っても・・・ 10分経っても・・・ 返事がない。

『ヒロ、メールシテ』

黙って消えないでよ

あ、返事がきた。

『イマ、メールデキルキブンジャナイ』

どういうこと？

『ドウシテ？』

『カナリマズイ』

え？

『ナニガ？』

『オレ』

なに？ なんで？ なにがあったの？

『イマ、ドコニイルノ？』

『ソト、アルイテル』

何が起こったの？

『ヒロ、ナニガアッタノ？』

『ゴメン、イマハイエナイ』

わからないよ！ 言ってくれなきゃわからないよ！

『ヒロ、デンワシテ！』

私のピッチは沈黙したまま。

『ヒロ、デンワスルカラ』

ヒロの番号に電話したけど鳴り続けたまま・・・

『ヒロ、デンワトッテ！』

またかけた。

呼び出し音が途中で切れた。

電源切られた。

電源切られたら・・・ どうやってあなたとつながればいいの？

あなたと私は、このピッチでしかつながってられないのに。

あなたが何も言ってくれないと、私は何もわからないよ。

だって、私はあなたの近くにいるわけじゃないんだもの。

あなたの現実は絶対に見ることができないんだもの。

電源切るってさ・・・ 私のこと、私の存在を消すことなんだよ。

電源切れたら、私はもうあなたのピッチの中にいられないんだから。

わかってた、始まったときからね。

私とあなたの恋は期限付きだって。

恋はいつかは終わるって、そういうことじゃなくて。

私が私でいる限り、必ず終わることだって、最初からわかってた。

それから2日経ってもヒロからのメールはなかった。

そして、今日は土曜日、今は土曜日の夜。

今日だよね。

『ヒロ、タイセツナハナシガアルノ』

もうヒロが返信してこなくてもいい。

私が送信すれば、今じゃなくても、絶対に読むはずだから。

『マリ、ドウシタノ？』

あ、返信がきた。

私がメールするまで・・・ あなたは何を考えてたの？
今はもうどうでもいいことだけど・・・

『サッキ、パパトケンカシタ』

『マリ、ダイジョウブカ？』

『ダイジョウブジャナイ、ピッチトラレル』

『ドウイウコト？』

『パパガオコッテ、アシタカイヤクスルッテ』

私は続けてメールを打ち続けた。

『トモダチノバンゴウ、メモスルカラッテ』

『ソレハユルシテモラエタケド』

『モウスコシシタラ、パパニワタサナイト』

『ダカラ、モウ・・・』

『ヒロトメールデキナクナッチャッタ』

『ゴメンネ』

全部ウソ。

全部・・・ このメールだけじゃなくて・・・ 全部・・・

始めから・・・ 全部・・・

『ソナナキハシテタ』

ヒロの言葉は意外じゃなかった

『オレノセイダヨネ、ゴメンネ』

ヒロが私が言葉にしない方の言葉にごめんねって言ってるのはわかった
でも・・・

『ヒロハワルクナイヨ、パパダヨ』

私はピッチの画面の文字の方で応えた。

『ヒロトデアエテ、シアワセダッタヨ』

それは本当のこと・・・

『オレモ』

『ヒロノヒロシマベンスキダッタヨ』

それも本当のこと・・・

そして・・・

私は・・・

『ヒロ、オネガイガアルノ』

『ナニ？』

私は・・・ 私が私のまま、存在していたことを、残したい。
一生消えない焼印を、ヒロの心に残したい。

『ウンメイノヒトヲキイタラ

『ワタシノコトオモイダシテネ

『アレハワタシノウタダヨ』

私はズルイ・・・ わかってる・・・

『マリ、アリガトウ』

これで、あなたの心の中に、私は刻印された。

一生消えない、私は、マリは、呪いみたいに、

あの曲が聞こえると、きっとあなたは私を思い出す。

何年経っても、何十年経っても。

あなたの中の私は、16歳のマリは、あなたがあの曲を耳にするたびに息をする。

16歳のマリのまま。

知ってるんだよ、私・・・

男の人は昔の恋を忘れられないって。

思い出の曲を聞いたら絶対に思い出すって。

これしかなかったの、私が本当に存在したって証拠を残すのはこれしか・・・

『ヒロ、ゲンキデネ！』

『マリモゲンキデネ』

『ヒロ、サヨナラ』

ヒロの返事は待たずに、私は電源を切った。

次の日、“あの人”が、ピッチを新しいのに買い換えた。

私は・・・ 自分の部屋に入って・・・

そのピッチを、あかりが・・・

『アカリデス！アトラシイピッチデス♪』

送信！

次は・・・ もーっ、メル友10人で多すぎかなあ、多すぎだよな。

いつだっけ？ 5人から同時にメール来て、書いてること全然違うから、

ババババって、それぞれに合った返信したんだよ、聖徳太子みたいじゃない？

どれもくっだらなメールだから簡単だったけどな。

少し減らそうかなあ、やっててもおもしろくないヤツ。

この、バイトでDJしてるっていう高3のヤツ、洋楽が好きだっていうから、

『オススメノキョクハナニ？』って聞いたら、薄っすいの。

TVでも流れてるようなミーハーなのばかりで、キミ、まだまだだねって思ったけどな。

でも、ピッチの使い方とかは詳しいからいちおうキープ。

えっと、こいつはたしかどこかの工業高校の2年でチョーおバカ。

3日に一度くらいしかメールこないけど、それがまたバカすぎて返事に困るんだけど、
ときどき笑えること書いてくるんだよな。

『スウガクヤベー！ タマゴ！』

卵？

『タマゴッテナニ？』

『ゼロ、0』

チョー一笑った。

『ツギハヒヨコニナレバイイネ！2』

『ウケル！ ワラッタ～！』

笑ってる場合じゃないとは思うけどな。

まあいいや、いちおうキープ。

これは・・・

ああ！ このピッチに買い替える前の晩、真夜中に最後にメールした相手。

なんでメル友になったんだっけ？

たしかメル友募集の掲示板に「カノジョがいるので友だちになってくれる人募集」って、
カノジョがいるのに知らない女の子とメル友になるの？って思ったけどな。

なぜかこの人とは“マリ”って名前でメル友になったんだよ、なんでだったかな？

初めのうちはどんなやり取りしたのかあんまり覚えてないんだけど、

ハッキリ覚えてるのは、この人の名前がタカアキで、この人から来たメールへの返信に、

『タカユキは・・・』って名前間違えて打って送っちゃったんだよね。

そしたら、『タカユキッテマエノカレシ?』って返信が来て、

『チガウヨ～、キンジョノ5サイノオトコノコ』

『ホントニ?』

ウソだけどね。

『ホント! ワタシニナツイテテウルサイノ』

な～んかまだ疑ってるなあって思ったから、

『ナマイキナノ! マリノペチャパイッテイウノ!』

で、続けて・・・

『ア、ペチャパイッテイッチャッタ!』

って送ったら、

『ハハハ! ソウナノ?』

って来たから、

『タカアキ、ヒドーイ! ヒテイデキナイケド』

『マリッテカワイイ』

カノジョいるのに、他の女の子に可愛いって言っちゃダメでしょ。

『タカユキモオトウトミタイニカワイイノ』

私に可愛いって言っちゃったことを気にしないふうに話そらしてあげた。

『ワタシ、ヒトリッコダカラ』

『オニイチャンホシカッタナ～』

『タカアキ、オニイチャンニナッテクレル?』

“おにいちゃん”っていうポジションなら、カノジョに罪悪感感じないでメールできるよね。

『マリノオニイチャンニナッテヤルヨ』

本当になりたいのは違うって・・・ 私、な～んかわかったんだよね。

『タカアキ、ヤサシイ!』

男ってさあ、ほめられるの大好きだよ。

『マリガカワイイカラ、ナッテヤルンダゾ』

はいはい。

『ウレシイ! ナンデモソウダンニノッテネ』

『ナンデモイッテイイヨ!』

それからタカアキは前より頻繁にメールしてくるようになって、

ときどき夜もメールしてきたりして。

おいおい、カノジョがいるのに、夜に他の女の子とメール?

タカアキがどんどん私に魅かれてるなあってわかった。

でも、カノジョいるって私に言っちゃってるし、“おにいちゃん”だから、

私が警戒しないでメールしてるって思ってるから、何も言い出せないことも。

最後の晩の前の夜にメールが来て、ピッチ代がオーバーしちゃって、明日の夜から1週間止まるって知らせてきた。

『サミシイナ』

ちょっとね、だってタカアキの心がスケスケでおもしろいんだもん。

『アスノヨル、マリニメールスルヨ』

『イイノ？』

カノジョはいいわけ？ まあリアルに会ってるからね。

『ウン、キレルマデメールシタイ』

『ウレシイ！』

私がもしカノジョなら、このメール見たらぶち切れるけどね。

そして、昨日の真夜中近くにメールがきた。

『マリ、ツナガッタラスグメールスルカラ』

『ホント？ ワタシノコトワスレナイ？』

『ワスレルワケナイジャン！』

『サミシイナ』

『オレモ』

あと1分で0時になるとき、

『ソレジャ、マッテルネ』

『ゼツタイメールスルカラナ』

で・・・

これを送ったら切れるなっていう直前に、私は最後のメールを送ったの。

『タカアキガ、スキ』

はい！ 終わり！

・・・って思ったら、タカアキからメール！

『マリ、イマノ、ホンキ？』

あ、ヤベ！ まだつながってるじゃん。

『トドカナイトオモッタカラオクッタノニ』

『オレノコトスキッテ、ホント？』

『ウン、デモ、カノジョガイルカラ』

『オレモ、マリガスキ』

やっぱり！

『デモ、カノジョハ？』

『マリトメールスルヨウニナッテ』

『マリノコトガドンドンスキニナッタ』

『イマハ、マリシカカンガエラレナイ』

そりゃそうだよね。

現実のカノジョはワガママ言うし、怒るしスネるし嫉妬するし。

でも、ピッチの中の“私”は、ワガママ言わないし、怒らないし、

言ってほしいことを言ってくれるし・・・ね。

絵に描いたような理想の女の子だもんね。

『ホント？』

『ホントだよ、オレハマリガスキ』

『ウレシイ！』

『ダカラ、ピッチツナガルマデマッテテ』

『ウン、マッテル』

『ツナガッタラ、スグメールスルヨ』

『ゼッタイ？』

『ヤクソクスル！』

『タカアキ、ダイスキ！』

『オレモ、マリガダイスキ！』

『ソレジャ、マタネ！』

『ウン、マッテテネ！』

そこでヘンな音がして電波が切れた。

もしも、あなたが1週間後に私にメールしてきても、

明日には新しいピッチになるから、私にはもうつながらない。

現実のカノジョのところに戻りなさい。

あなたとメールしてた“マリ”みたいな女の子なんて、この世に存在しないんだから。

そんな都合のいい理想の女の子なんているわけないじゃん。

やっぱり簡単に落ちちゃった。

だから男って嫌い。

削除。

メル友募集の掲示板には女子もいるんだけど、
「メル友になりませんか？」って送っても無視。
女子とはメル友になる気はないってことね。
だったら「男子限定」って書いといてよ。
いかにも物欲しそうだから書けないか。

私は女子でも男子でもどっちでもいいんだよね。
楽しいメールができれば。
メル友と“恋愛”する気なんてない。
顔も見たことない相手と恋愛なんかできるわけないじゃん。
メールだけで恋するなんて、マンガの主人公に恋するようなものでしょ。
そんなの本当の恋じゃないよ、架空の恋愛ごっこだよ、バカみたい。
本当の恋愛だったらさ、ケンカだってするでしょ？
それで泣いたりして、もうダメかもとかね。
お互いがどうしても好きだったら、また仲直りして・・・とか？
メル友とケンカしたら速攻削除で終わりだもん、簡単だけど、恋愛じゃないよね。
ていうか、メル友だと、こいつイヤだなあとと思ったら削除しちゃえばいいだけ。
ケンカなんてありえないよね、メールでケンカするヤツなんかサイテーだしね。

あ、メール。

こいつは・・・ あ、札幌の高2のリョウくん。
この人ねえ、悪い人じゃないんだけどねえ、あんまりおもしろくないんだよね。
どんな曲が好き？とかさ、私が好きな曲なんて興味あるの？って思っちゃう。
いちおう「宇多田ヒカルとか19とか」って書いておいたけどね。
この人はGLAYが好きなんだって。
北海道だからGLAY？ ベタ過ぎて思ったもん。

『リョウです。すぐにメールできなくてゴメン』
そうなんだよねえ、この人、最初から長文メールなんだよお。
ふつうの20文字の方が楽なんだけどなあ。
『ゆうべは夜のシフトだったから、遅くなってメールできなかった』
な～んかねえ、マジメなんだよねえ。
他のメル友たちなんか夜中でも送ってくるよ、すぐに返信しないけどね。
『ピッチ、新しいのにしたんだね。どこの機種？』

どこの機種って・・・

『あかりです。どこの機種かわからないけど、白です』

だってホントにわからないんだもん、白が素敵だから選んだだけ。

だいたい機種のことなんか聞いておもしろい？

『あかりちゃんは白が好きなの？』

私が好きな色聞いてどうするの？ おもしろい？

『白とかピンクとか好き』

『女の子っぽいね』

女の子だからね。

『リョウくんは何色が好き？』

興味ないけどね。

『黒とか赤かな』

えっと・・・ なんて返せばいい？ 男の子っぽいね？

な——んにも浮かばない。

『あのさ、あかりちゃんのこと、あかりって呼んでもいいかな？』

今？ 今さら？ そういうことって、わりと初期に聞くことだよ？

『いいよ、でも、なんで今聞いたの？ もっと前でもよかったのに』

ちょっとイヤミ入れたりして、フツ。

『始めたばかりで呼び捨ては悪いかなと思った』

マジメすぎる————っ。

『私はリョウって呼んでもいいの？』

『好きに呼んでいいよ』

好きになって、どうでもいいんですけどおおおっ。

だったら、マジメくんて呼んでもいいわけ？

『それじゃ、リョウって呼ぶね』

打つの楽だからね。

『なんか照れる』

はあああああっ？ たかがメールで、照れるっ？ バッカじゃない？

その「照れる」に、なんて返せばいいの？

『今日もバイト？』

どうでもいいんだけど、これしか浮かばなかったよ。

『今日はないよ』

あ、そう。

ああああああ退屈。

そうだ！

『ゴメン、ママが呼んでる』

呼んでないけどね。

『そっか、それじゃまたメールするよ』

『うん、またね!』

ピッ

私のメル友の中でいちばん退屈かも。
マジメすぎるんだもん、おもしろくないよ。
他のメル友もあんまりおもしろいやついないけどね。
新しいメル友探そうかなあ。

ベッドに寝そべって本を読んでいるときがいちばんしあわせ。
本を読むのって呼吸するくらい必要。
でもね、メル友に「趣味は？」って聞かれると困るんだよね。
だって「読書」って暗くない？
暗いのはいいとしても、「どんな本？」て聞かれるともっと困る。
心理学とか世界史の文献とか、そんなこと言ったら男子ってビビるんだよね。
だから趣味はバレエってことにしてる。
やってたしね、今もやってることにしていると、レッスンの時間だからって言えるし。
なんかもうメル友やめよっかなあ。

あ、メール。

ああ・・・ マジメくん・・・じゃなくて、リョウくんか。

『俺は今バイトから家に戻ったところだよ。
あかりは何してるの?』

アリス・ミラーっていう心理学者の本を読んでいますけど、なにか？

あ——、めんどくさい！ 無視！
マジメくんとはメル友解消！
メル友のいいところってこれだよね。
メール返さなければ自然消滅。
リアルな友だちだとそうはいかないもん。

枕元にバンッってピッチ投げたら、ベッドの足元で寝ていた私の騎士が顔をあげた。

“我が姫！　どうかいたしましたか？”みたいな顔して。

「ペッタ〜ン」

抱きしめると濡れた鼻を私のほっぺたにくっつけて、しあわせそうに抱かれてる。

「おまえがいちばんだよお」

何も言わず・・・って、犬だから言えないけど、何があっても私の傍にいてくれて、

「おまえが人間だったらねえ、きつとかっこいいよねえ、恋人になれるよね」

人間の男なんてみんな自己中でワガママで気に食わないと怒鳴ったりするし。

私の気持ちなんてわかってくれようもしない。

男って嫌い。

マジメくんともバイバイ〜♪

あかり-初めての電話

信じらんない！

マジメくんのメール無視してから一週間経つのに、まだメール送ってくるって、なに？

メールだけじゃないよ、電話もだよ？

最初に電話がかかってきたときビックリ超えて恐怖だったよ。

だって、電話するほど仲良くなってたわけじゃないし、ずっとメール来ないのに電話する？

そういうことだってわからない？ ふつうわかるよ、メル友なんてそんなもんじゃん。

他にもメル友いるでしょ？ そっちとやればいいじゃん。

最初のあたりは、「メール来ないけど忙しいのかな？ 時間あったらメールください」で、時間ないで～す♪で無視してたら、なんかどんどん心配してきてるんだよね。

「何かあったの？」とか、「大丈夫？ 心配してます」とか。

こいつの頭の中で、私は誘拐されて監禁されてることになってんじゃないの？くらい。

さっきも電話鳴ったし、メールも来たんだよ。

『あかりから急にメールが来なくなって、本当に心配してます。

悪いと思ったけど電話して、でも出ないから何かあったのかと・・・』って、なんでこんなに心配してるの？

わかんない。

あいつへのメールの返信だって、なんていうか、事務的？ そんなカンジで、

男子が言ってもらったら喜ぶだろうってことなんて書いたことないし、

ていうか、そういうカンジのやり取りじゃなかったし。

わっかんない。

あ、また電話！

どうするううう？

このままだと一生続きそう、一生は続かないとは思うけど。

あ！ そうだ！

風邪で寝込んでるってメールする？

熱出して寝込んでたらメールや電話なんかできないじゃん。

それだ！

そしたら、原因がわかって、まあウソだけど、安心するんじゃない？

メールと電話攻撃もなくなるよ。

そのあとは・・・ それはまたそのときに考えよう。

『リョウくん、メールや電話もらってたのに返せなくてごめんね。

風邪ひいて熱が出てずっと寝てたの。今も少し熱があるから、しばらくメールできないかも』

送信！

ウソだけどいいよね。

メル友なんてウソだらけの世界だもん。

なに、ペーくん？

なんでそんな目で見てるの？

ウソついちゃダメですよって？

「ペッタンにはウソつきまちなんよお、ダーイーチュキだもーん！」

なでなですると、最高のご褒美もらったみたいに嬉しそうに私の胸に顔うずめちゃって！

おまえといるときだけが本当の私でいられるよ、このまんまの私で。

あ、メール。

『あかり、風邪ひいて熱もあるのにメールしてくれてありがとう。

あかりが辛いときに、何度もメールしたり電話してごめんね。

あかりが辛い知らないで、メールや電話なんかして、

すごい自分勝手だったなって反省してます。

具合の悪いあかりに気をつかわせてしまったことも。

とにかく今はゆっくり寝て風邪治してください。

早く楽になるといいね。本当にごめんね』

え・・・ 反省しちゃってる。

反省する必要ないよ！ 風邪ひいてることなんてわかるわけないじゃん！

てか、風邪ひいてないけど。

ええええ・・・ なんか悪いことしちゃった気分なのはなぜ？

もっとさあ、もっと軽く、“風邪ひいてたの？ 早く治ればいいね”くらいでよくない？

どうしよおお・・・

ハッキリ「もうメル友やめます」って言った方がよかったのかなあ？

こんなに反省されちゃったらさあ、しかもウソなのにさあ。

なんかやっぱり悪いことしちゃった気になっちゃうよお。

電話・・・ する？

電話して、もう熱はだいぶ下がったから安心してって言って、
あとはまあテキト〜に？ それに、私の声聞いたら・・・ねえ・・・
あっちの声とか話し方もウゲッだったら、ハッキリ断れるしさ。

そうしよう！

ああもうドキドキする。

初めての電話で私からするなんて・・・ 初めてだよお。

リダイヤル押して・・・

心臓バクバクしてるよおおお

ベルが・・・ 一回・・・ 二回・・・ あっ！

「あかり！」

その声が・・・ 私の名前を呼ぶ声が・・・

「大丈夫か？」

一瞬で・・・ まるで・・・

「電話なんかして、まだ熱あるんだろ？」

後ろから抱きしめられたみたいな・・・

「え、あ・・・ リョ、リョウ・・・くん？」

ちょっとかすれたような元気ない声にしたけど・・・

「俺の電話で起こしちゃったか？」

「う、うん、起きてたから・・・」

「具合悪いのに電話なんかして大丈夫なのか？」

なんだろ・・・ この・・・ 感覚・・・ すごく・・・

「あ・・・ ね、熱はもう、かなり、下がったから」

「それでも、まだ寝てなきゃダメだろ」

なんだかもっと・・・ ずっと・・・

「あ、あの、何度もメールや電話くれたのに、ごめんね」

「それ言うためにわざわざ電話くれたのか？」

「う、うん」

「俺のことはいいんだよ、具合悪いのに電話しなくていいんだよ」

「で、でも、すごく心配してくれたから」

「そんなこといって、それより早く寝た方がいいって」

「でも・・・」

でも・・・ もっと・・・ 聞いていたい・・・

「熱は、もうかなり下がったから」

「そんなこと言って起きたりしたら、また具合悪くなるぞ」

「うん・・・ でもね・・・ でも・・・」

「どした？」

「もうちょっと・・・ リョウくんの声・・・ 聞いていたい」

あ・・・ 言っちゃった・・・！

「風邪が治って元気になったら、いくらでも聞かせてやるよ」

そう言って笑う声が・・・ 誰かに似てる・・・ その笑い声を・・・ もっと・・・

「あかり、電話してくれてありがとう」

「う、ううん、私こそ、心配させちゃってごめんね」

「謝るなよ、あかりは何も悪くないよ、俺が気いつかわせちゃったんだな」

「そ、そんなことないよ」

「早く寝た方がいいぞ」

「うん、あの・・・ あのね・・・」

「どした？」

「また・・・ 電話してもいい？」

「風邪治ったらな」

まるで・・・ 困った子だなんてカンジの笑い声が・・・

「うん」

「じゃ、ちゃんと寝ろよ」

「うん、じゃあね」

「またな」

ピッ

ウッソーーーーー！

なにこれなにこれなにこれーーーー？

メールのカンジと全然ちがーーーーう！

本気で心配してた。

しゃべってる言葉全部が本気だった。

私のこと本気ですっごーーーーく心配してるのがピンピンに伝わってきた。

話している間ずーーーーっと、なんか、大きな腕で抱きしめられてる感覚で、
ずっとそうしていたいなんて思っちゃって・・・

しかも、声が・・・ 好みなんだけどおおお！

笑い声なんかもう・・・ あ！ V6のゴウくんみたいな笑い方で、
ゴウくんはそんな好きってわけじゃないけど、声は似てないけど、
あの、なんていうの？ バカ笑いじゃない笑い方っていうの？

可愛いもの見たときに思わず出るみたいな笑い方っていうの？

ヤバイ・・・

切れない。

ていうか、切りたくない。

ウッソーーー！

私、どうしちゃったのーーっ？

あかり-どうということ？

あれから電話もメールもこない。

ピタッと。

まあ・・・ 風邪ひいたってことになってるけどさあ。

でも、だいぶ熱も下がったって言ったんだから、メールくらい送ってきててもよくない？

な———にもだよ、な———んにも！

あんなにメールと電話バンバンしてきたくせに。

そうだよ、男ってそうなんだよ。

安心すると気が抜くんだよ。

私もなんで「また電話してもいい？」なんて言っちゃったかなあ？

あれで、気があるとでも思ったんじゃない？

それでもう感心なくなったとかね、ありうる。

私の声聞いたらガッカリしたとか？ そうかもね、いいけどべつに。

いっそフツちゃう？ それもいいかも。

風邪が治って元気になったら、メル友する気がなくなっちゃったとか？

でも、あんなに心配してくれたのに、それは悪いかな？

だったら・・・ バレエのレッスンが忙しくなってメールできないはどう？

でもさあ、いい気にさせたままで終わるってアタマにこない？ くる。

可愛いいいカンジで、喜びそ～なこと書いて、その気にさせてエンド！

それだ！

もうあれから二日経ってるから、風邪はすっかり治りましたの設定でいいよね。

『リョウくん、あかりです。風邪はもう治って元気になりました！

心配させちゃってごめんね、もう大丈夫だよ』

送信

返事くるかな？ 来なかったりして？ それってチョー——、あっ きた！

『あかり、元気になってよかった！』

だけ？ それだけ？

あ、そう！ 攻撃開始だ！

『リョウくんが全然メールくれないから、私のこと忘れたと思っちゃった』

可愛くみせて、このイヤミって、わかる？

『あかりから連絡くるまで待ってた。

俺がメールしたら、また気を使って、具合よくないのに返信するだろうなと思ったから』
ホントかなあ？

さて、次はなんて送ろうかな？ よし、これだ！

『淋しかった？』

なんて返信してくるかなあ？ 淋しかったよとか？ まあそう言うよね、思ってなくてもね。

『俺はあかりよりおとなだからな』

ハアッ？ なにそれ？

『全然淋しくなかったの？』

『あかりが元気になることが先だろ』

え・・・ なんていうのかな・・・ 手が読めない？

『どういうこと？』

『あかりの風邪が治ること』

そういうことじゃなくて！

『淋しくなかったの？ 全然？』

『あかりは？ 淋しかったの？』

エッ・・・ それは・・・

ど、どうすればいいの、なんて言えばいいの、「おしえない」とか？

もうわかんないっ。

『淋しかった』

もうどうでもいい・・・

『あかりは素直だな』

素直とかそういうんじゃないで、もうどうしていいかわかん・・・ まあ、素直か。

『うん、素直だよ』

あんたと違ってねっ。

『ときどき素直じゃないけどな』

ハ？ なにそれっ？ あんたに何がわかるの？ てか、ときどき素直じゃないってなにっ？

『そうなの？』

って、こいつに聞いてどーするっ!? だけど、わかんないんだもんっ。

『だから、あかりはおもしろいんだよ』

おもしろいってどこがっ？ なにっ？

『私のどこがおもしろいの？』

『全部』

全部って、漠然としすぎてわかんないよ———っ！

『あかり』

ン？

『風邪治ったばっかなんだから、あんまりムリしちゃダメだぞ』

な・・・なに、この急なトーンの変わり方・・・

『ムリしてないよ』

風邪ひいてなかったし・・・

『あかりがまた風邪ひいたら、俺、また待ってなきゃいけないじゃん』

え？ それは・・・ え？ えっと・・・ え？

『待ってたの？』

『最初に言っただろ』

ホントだったの？

『そろそろバイトだから、また明日メールする』

『うん、わかった』

なんかよくわかんなくなってるけど・・・

『あかりが元気になってよかった！』

『ありがとう』

『そんじゃまたな』

『うん、いってらっしゃ〜い！』

『今の笑った！』

なに？ どこ？ 何がツボ？

『いってきます！』

プチッ

なに・・・これ・・・

おかしい！ なんかおかしい！ なんていうか、私のペースじゃない！

私のペースになれないっていうか、なんなのあいつ？

「俺はあかりよりおとなだからな」？ あんたのどこがおとななのよ——っ!?

ときどき素直じゃない？ なにそれ——っ!? だからおもしろいってなにっ？

でも心配してたよね、でも、わけわかんない！

てかさ、電話する前までのメールと別人みたいじゃない？ 別人？なわけないか。

なんか、あいつ・・・

なんか・・・

おもしろいかも。

あかり-バス停

冬ってキライ。

寒いのが苦手だし、雪なんて見るのもイヤ。

ドラマとかでさ、「あ、雪だ〜♪」ってドラマティックなときに降るけど、

それって、たま〜に降るからでしょ？ ずーっと降りっぱなしだとウンザリしかないよ。

窓から庭に積もってる雪を見ると、閉じ込められてる気分になるよ。

な〜んか憂鬱。

で、退屈だぁぁぁ。

誰かにメールしようかなあ、誰に？

くだらないメールなんかしたくもないし・・・

あ！ リョウくん！

『リョウくん、今なにしてるの？』

何しててもいいんだけどさ。

あ、返信。

『今、バス停でバス待ってるところだよ』

そういえば、リョウくん、札幌だよな。

『寒い？』

『凍ってます』

そうだよな、北の大地だもんね。

『あかり、温っためてよ』

ハ？ でっきるわけないじゃん。

『頭からお湯かけてあげればいい？』

『俺死ぬっしょ』

ハハハハハ、おもしろい！

あ、そうだ！

『ねえねえ、おにいさん、聞いてもいい？』

一個上だもんね。

『なんでも聞いてください』

言ったね？

『Kissしたことある？』

なんでも聞いていいんでしょ？

『あかりちゃ〜ん、なかなか直球ですねえ、ありますよ』

あるんだ！ まあ、あってもおかしくないけどな。

『ファーストキスってこと？』

『それは中学のとき』

それは・・・ってことは、それからもしたんだあ、へえ！
てか、中学でファーストキス？ それってふつう？ よくわかんない。

『あかりは？』

あるわけないじゃん。

『したことないよ』

『ウソつけ、あるだろ』

ホントだもん！ 私はKissしたことない、できない、これからも・・・

『信じなくてもいいけど、ホントだよ。したいと思う相手がいらないもん』

『マジか、あかりちゃんはウブですねえ』

ウブ・・・じゃないけど

『それじゃ、Kissしたことあるおにいさん、もうひとつ聞いていい？』

『いいですよ』

『おにいさんは・・・ Hしたことあるの？』

こんなこと男子に聞いたことないよ、顔が見れないから聞けるよね。

『あかりちゃ～ん、おにいさん、今、顔が真っ赤ですよ』

赤くなってるの？ ムフツ、笑える！

『あかりちゃんはなかなか大胆ですねえ。

Kissもまだのあかりちゃんに、こんな話していいのか、おにいさん悩みますよ』
おにいさんキャラ気に入ってんじゃん。

『あるの？』

『あかりちゃんが想像した方ってことにしておきましょう』

『あるんだ！』

『おっと、そっちを想像しましたか。アタリですね』

ヒャー——！ 高2で経験済みの子って初めて会った！ 会ってないけど。

『リョウくんて、オトナ！』

『あかりよりはね』

そうかなあ？ さて、どうでしょうねえ。

『あかり、バスが来たから、またメールする』

『エッチなおにいさん、行ってらっしゃ～い！』

『エッチなおにいさんは、行ってきます！』

ピッ

楽しかったあ！

そうなんだよ、こういうメールしたかったんだよ。

メル友なんだからさ、顔見えないから言えることってあるじゃん？

恋愛ごっこなんてウンザリ、恋愛したかったらリアルな相手探してよってカンジ。

顔も見たことない相手と恋愛できるわけないじゃん。

疑似恋愛なんて恋愛じゃないから！ ただのゲームだから！

私はもうゲームには飽きたんだよ。

だって男なんて、結局みんな同じなんだもん。

甘えん坊な女の子が好きって言うっておきながら、実は自分がいちばん甘えん坊だし。

リアルな女の子だと手におえないから、ピッチの中の優しいだけの女の子がいいんだよ。

なんていうの？ 実はまだまだママのオッパイ吸っていたい赤ちゃん？

子どもの相手なんかウンザリ！

あのバス停のメールから、リョウとは頻繁にメールするようになった。

『リョウの髪は何色？』

『ちょっと前までは真っ赤だった』

ま、真っ赤――？

『今はダークブラウンでカンジかな』

『なんで真っ赤にしたの？』

『ちょっとバカなことしたくなったから』

へえ、その頃、何かあったのかな？

『あかりはロング？ ショート？』

『ストレートのロング』

『なんだあ、俺、ショートが好きなのになあ』

そんなと言われてもさっ、私はロングが気に入ってるんだからいいじゃん！

『切る気ないの？』

なんで切らなきゃいけないのよっ!?

『絶対切らない』

『俺がショートが好きなのに？』

『リョウの好みに合わせる気なんか無いもん!』

『合わせなくていいよ』

ハ？

『あかりはあかりだからさ』

私は私だから？

『どういう意味？』

『そのまんまの意味』

『でも、ショートが好きなんでしょ？』

『べつにどっちでもいい』

ハァァァァァァ？

『ショートが好きって言ったじゃん!』

『あかりがどう反応するのかなと思ってさ』

なんだとおおおおっ!?

『からかったの？』

『そういうことになるかな』

ヒド―――イ！

『リョウなんかキライ!』

『ウソだね』

ハア？ なにその自信？

『なんでウソだって言い切るのよ？』

『本当に嫌いな相手には嫌いって言えないだろ』

そ・・・ そうだけど・・・

『あかりは、嫌いなヤツの前から突然消えるタイプだよな』

えっ・・・

ちょっと思い返しちゃった・・・ 最初の頃、自然消滅しようとして・・・

『だいたい俺のこと嫌いなら、こうやってメールしてたらバカだろ』

ああも——っ、いちいちアタマにくる——っ！

そのとーりだからアタマにくる——っ！

よし、反撃だ！

『それじゃ、リョウは私のことが好きだからメールしてるの？』

そうだよ、でなきゃメールしてたらバカってことでしょ？

『さあ、どうだろうなあ』

ハアッ？

『なにそれ？』

『あかりがくだらないこと聞くからだよ』

く　くだらないだとおおおっ？

『何がくだらないのよ！　だったら私のこと嫌い？』

『またくだらないこと言った』

なんだか・・・ なに・・・ だんだん・・・

『リョウ、私のこと、からかっておもしろがってるだけなら、もうやめて。

ホントに悲しくなってきたから、もう今ちょっとメールできない』

ピッて送信して、ピッチをベッドの上にポンッて放り投げた。

なんでこうなっちゃったの？

何からこうなっちゃったの？

なんか小学生のときに、クラスのいじめっ子の男子にいじめられた気分。

ベッドの上で電話が鳴ってる。

リョウから。

電話なんかしたって私が出ると思う？

今、すごくあんたにムカついてるんだから！

放置っ。

忘れてた。

ていうか、思い出した。

こいつがしつこいっていうか粘り強いってこと。

30回コールして止まって、少ししてまた30回コール・・・が、今で5回目。

出るまで続けるつもりだよね・・・

はあああ・・・

出ればいいんでしょ出れば。

ピッ

「あかり」

「・・・なに？」

「ちゃんと聞けよ」

「・・・聞いているよ」

「俺は、好きとかそういう言葉は、メールなんかじゃ絶対言わないんだよ」
だったら・・・

「電話なら言うの？」

「電話でも言わないよ」

「だったら、いつ言うの？」

「あかりと会ったとき」

「会ったとき？ どういうこと？」

「いつか、あかりと俺が会ったときだよ」

「会うって・・・ どういうこと？」

「俺があかりのところに行くか、あかりが俺のところに来たときだよ」

え・・・

それは・・・

「ムリだよ・・・」

「なにがムリなんだよ？」

「会うって・・・」

絶対ムリ・・・

「そんな・・・ 急に言われて・・・ なんか・・・」

「今すぐってことじゃないよ、俺はその気だからってことだよ」

「あ・・・うん・・・」

リョウがその気でも・・・

「俺さ、あかりと会ったら、一緒に聴きたい曲があるんだ」

「なんて曲？」

「それは会ったときに聴かせてやるよ」

私ね・・・ リョウが私に聴かせたい曲・・・ わかっちゃった・・・

でも、それは・・・ 絶対に一緒には聴けない曲・・・

「あかり、俺、あかりのことからかっておもしろがってなんかいないよ」

「でも・・・ なんかイジワルだった・・・」

「それは、なんつうの？ 可愛いなあと思うとちょっといじめたくなる男の心理てかさ」

ハァアアアッ？

「小学生のガキじゃーん！」

「あかりが可愛いから悪いんだよ！」

「ハァアアアッ？ 私が悪いのっ？」

「そうだよ」

「なんで私が悪いのよっ？」

「だから、可愛いからつったろ！」

「なんで怒ってるみたいに怒鳴ってそんなこと言われなきゃならないのよっ？」

「怒ってねえよ！」

「じゃ、なによっ？」

「可愛いっただけだろ！」

あれ？

「ねえ、可愛いは、電話で言っているの？」

「え、それは、まあ、大サービスだよ」

「ハァアアアアッ？ なにそれ？ 大サービスって、お店のバーゲンみたいじゃん！」

「はい！ 可愛いよ！ すごく可愛いよ！ 可愛いですよー！」

「バカにしてーっ！」

「バカにしてませんよ！ 可愛いですよ！」

「リョウなんか、リョウなんか、大っ嫌い！」

「ウソだね」

「ウソだよっ！」

あーもーっ！

どうしてこうなっちゃうのっ？

GLAYのCD買ったことはリョウにはずっと言ってない。

だから、私、この前リョウが、私と一緒に聴きたい曲があるって言ったとき、わかっちゃったんだよ、どの曲かって。

そんな日は絶対に来ないってわかってるから・・・

せめて、リョウが聴いている曲を聴いていたい。

会いたいなんて言わないで。

私は・・・リョウのポケットの中に入れてそれであわせだから。

それしかできないから。

最近、リョウはメールより電話してくる方がずっと多い。

私をからかって笑う笑い方は、やっぱりゴウくんみたいで、

思わずフフフツツ笑ってるって、そんなカンジで、ずっと聞いていたくなる。

「あ、ちょっと待って。うちの犬が庭に出たいみたい」

「犬飼ってるの？」

「うん、はい、ペーくん、出ていいよ！」

「どんな犬？」

「ミニチュア・シュナウザー」

「大きいの？」

「ううん、中型犬」

「あかりは犬が好きなんだ」

「うん、小さい頃からずっと犬がいたからね。リョウは犬は好き？」

「俺は・・・猫が好きだな」

猫派か、合わないね、いいけど。

「あかりは猫だよな」

「ン？ なに？」

「あかりは猫だって言ったんだよ」

私が猫？

「どういう意味？」

「気まぐれで、自分が傍に来たいときだけ寄ってきて、イヤになるとサツといなくなる」

「なにそれ？」

「あかりのこと」

ハア？

「私わがままだって言いたいの？」

「違うと思ってんの？」

「そ、それは・・・私、わがまま？ そんなにわがまま？」

「わがままっていうか、猫」

「なにそれ？ 意味わかんない」

「今はここにいるけど、ちょっと目え離したらどこかに行っちゃうんだよなあ」

コノ人ハナニヲ言ッテルノ???

「だから目が離せないんだ」

「何が言いたいなの？」

「俺は猫が好きって話」

これって話つながってる？

また笑ってるけど、私の頭の中「????」なんだけど？

「あかり」

「なに？」

「会おう！」

「ハ？」

「俺、あかりのところに行く」

エッ

「決めた！ 俺が行く！」

なんで・・・

「今週はムリだけど、来週なら行ける」

「そ、そんな急に・・・」

「いいじゃん、会おうよ」

「でも・・・」

「俺に会いたくないの？」

そうじゃなくて・・・

「そうじゃなくて、会いたい・・・けど、きっと、リョウは・・・」

「俺が、なに？」

「私に会ったら・・・ ガッカリすると思う・・・ もう二度とメールも・・・」

「俺がなんであかりにガッカリするの？」

「だって私・・・」

「俺はあかりの外っかわを好きになったわけじゃないよ」

そうだけど・・・

「あかりはあかりだろ」

そうなんだけど・・・

「それとも、俺なんかとは会いたくないってこと？」

「そうじゃないよ」

「それとも、本当は他につきあってるヤツがいるの？」

「いないよ！ 私がそんな女だと思ってるの？」

「思ってないけどさ、なんで会いたくないかわかんねえよ！」

「わけがあるの！」

「わけ？ どんな？」

「言えない！ 言いたいけど言えない！」

「なんだよそれ!？」

「言いたいよ！ 本当は！ だけど・・・」

もう・・・ 悔しくて・・・ 辛くて・・・ 涙が止まらない・・・

「だけど、なに？」

もう泣くことしかできなくて・・・

「あかり、言ってくれよ、何言われても大丈夫だからさ」

「大丈夫じゃない！ リョウには・・・ リョウには、私の気持ちなんかわからない！」

「言ってくれなきゃわかるわけないだろ！」

「言いたいよ・・・ 言えるなら・・・ でも・・・ すごく・・・深い・・・ 誰にも言えない・・・」

「わかった！ あかりが俺に会えない理由を言わないなら、もう電話もメールもしない！」

「え？」

「あかりが俺に会うって言うまで、電話もメールもしてくるなよ！」

「そんなのイジワルだよ・・・」

「イジワルはあかりだろ！ わけもおしえてくれないで会えないだけでさ」

「だって・・・」

「それじゃ」

プチッ

ツーツーって音だけ聞こえる。

どうして？ どうしてこのままじゃダメなの？

このままだもしあわせだったのに・・・

シンデレラは12時になったら・・・

玉手箱を開けたら・・・

私は消えてしまうのに・・・

ドアを開けると、雪だらけになってるペーくんが立っていた。

「ごめんねえ、寒かったよねえ」

バスタオルで身体につけてる雪を払って、足にゴロゴロついてる雪玉は、お風呂のお湯で溶かして、ドライヤーで乾かして・・・

でも・・・ 頭の中は・・・ ぜんぜん違うこと考えてる・・・

「ペッタン、どうしよう？ リョウがね、私に会いたいんだって」

今私が話を聞いてもらえるのはペーくんだけ。

「ペッタンは私が私だってわかるよねえ」

私がそう言うと、ペーくんは私の膝に顔を置いて、そしてまた顔をあげて私を見る。きっとわかるんだね、私が今どうしたらいいのかわからないのが・・・

ううん、どうすべきかわかってる。

ただ、それは絶対にしたくなかった。

“あの人”のふりをすればいいだけ。

でも、それが「ふり」だけで終わるのか、そのまままた消えてしまうことになるのか・・・ そしたら、もう二度とリョウと話すことができなくなる。

でも・・・

もうすべてを打ち明けるしかない

今のは・・・ 私？ それとも、“あの人”？

このままでいられるわけがないもの、もう無理なのよ

本当のことを書くしかない。

どっちみちこうなるってわかってたんだから。

これで終わり。

いつか終わらせなければならなかったんだもの。

リョウに本当のことを書く。

たとえ、どんなに罵倒されても、嫌悪されてそれで終わっても、

ちゃんと伝えなければならないことがある。

私の中のどこかが・・・ 悲しいとか淋しいなんて、しかたないのよ。
これは期限付きだったの、始まったときに終わりも決まっていたのよ。

ピッチの長文メールの画面を出した。

これを送ったら、すべてが終わる。

『リョウへ

私はあなたに言わなければならないことがあります。

本当はもっと早く言うべきだったことです。

私があなたに会えないわけは、あなたに会いたくないからではありません。

本当に会いたいです、会いたかったです、でも、それはできないの。

なぜなら・・・』

それは現実で、だけどそれは真実でもない

『私は16歳ではありません。

もっともっと年上なの』

絶望が私の中のどこかから流れてくる

『ずっと言えなくてごめんなさい。

ずっと騙してしまっでごめんなさい。

ただ、これだけは信じてほしい、信じてはもらえないとしても。

あなたとの日々、あなたに言ったことはすべて本当の心です。

そこに嘘はありませんでした。

あなたに本当の私を隠していて、本当にごめんなさい。

あなたは嫌悪感でいっぱいになりながらこれを読んでいるとしても、

それは当然だと思っています。

今までありがとう。

さようなら』

何度も読み返した。

とうとう現実に戻ってしまった。

いつかは戻らなければいけないとわかっていたけれど、それは“今”だった。

送信

これですべてが終わった。

足元にペーくんが座っている。

「ねえ、ペッタン、おまえには私が誰に見える？

あかり？ まり？ 誰？」

ペーくんは、私の胸元に顔をうずめた。

「ペッタンは、私が誰だろうと、全部そのまんま愛してくれるよね」

でもね・・・

人間の現実は、私のような、私たちのことは・・・

え？ 電話？

リョウから・・・！

なんで？

きっと怒って罵倒するのね。

だって、騙したんだもの。

いいわ、もう、何を言われたって、終わってしまったんだもの。

「もしもし」

「なんだよこれっ!？」

そうよね、そう思うわよね・・・

「さよならって、なんだよ！ ぶさけんなよ！」

ハ？

「だ・・・だって、私、本当は16じゃないから・・・」

「関係ねえだろ！ さよならって、ふざけんなよ！」

ど・・・ どういうこと???

「あの・・・ ちゃんと読んだ？」

「読んだよ！ さよならって、アツマくんなあっ！」

え？ ど、どういう・・・

「だ、だからね、私、16じゃないの」

「読んだっつうの！ そんなの関係ねえよ！」

関係あるでしょおおお？

「あ、あのね、書いたけど、ずーっと年上なの」

「本当は何歳？」

それを言ったら・・・

「40・・・です」

一瞬で電話切るだろうな。

「な～んだ！」

ハ？

「俺、ぜーんぜん気にしない、てか、それくらいの年上の方が好きなんだ」

え？

「前に42の人とつき合ってたことあるし」

ハア？ 42とつき合ってた？

「俺は、あかりと絶対別れないからな！」

「でも・・・ 40だよ？」

「関係ないって言ってんだろ！」

え・・・ エーーーーーッ！

なんだか混乱しちゃってるんだけど？

「あかりは本名？」

それは・・・

「ち・・・ ちがう、本当は・・・ じゅん」

「俺はなんて呼べばいい？」

え？ これからもって前提で話が進んでる？

「あ、えっと、できれば・・・ あかりで」

「俺もそう呼びたかった、あかりって、あかりっぽいからさ」

そう・・・なの？

「あの、リョウは・・・ 本名？」

「そうだよ、良い悪いの良」

「そう・・・」

「あかりは独身？ 結婚してんの？」

「えっと、まずはバツイチで・・・」

「やるなあ！」

やるなあって、それは・・・ まあいいや。

「子どもは？」

「3人」

「何歳と何歳？」

「いちばん上は・・・ リョウよりひとつ上」

「おもしろえ！」

そうやって笑う声は、いつものあの笑い声で・・・

私は・・・ こんな展開になるとは思ってもいなかったから、

なんだか頭が混乱して・・・

「あかり、結婚しよう」

ハ？

「俺と結婚しよう」

何ヲ言ッテルノ???

「結婚って・・・ リョウはまだ17だから・・・」

「来年は18だよ」

いやいやいや、ちょっと待って、18って、そしたら私は41で・・・

あ、そうじゃなくて・・・

「リョウ、私・・・ 再婚してるの」

「え？」

「下二人はその人の子どもで・・・」

「なんで再婚なんかするんだよおお！」

そんなこと言われても・・・

「離婚して俺と結婚してくれよ」

離婚？ 離婚して、リョウと？

「でも、まだリョウとは会ったことないし・・・」

「会おう！ あかり、こっち来てくれよ」

「え？ で、でも、私・・・ 16じゃないよ？」

「わかってるよ」

「40の私と・・・ 会うの？」

「そう言ってんじゃん！」

なんだか話の流れが速すぎて・・・ めまいがしてる・・・

「俺、バイトのシフト替えてもらうから、そしたら連絡するよ」

「・・・うん、わかった、会う」

きっと・・・ 会えば、本当の現実を見て・・・ 終わりになる。

「あかり、もうさよならなんて言うなよ！」

「でも・・・ 私たち・・・ 先はないから・・・」

「え？」

「私には3人子どもがいるし・・・ それをリョウに背負うことは・・・」

「そういうのは今いいから、とにかく連絡する」

「わかった」

「それじゃ」

「うん」

ピッ

な ん だ こ れ ? ? ?

私は会いたくない。

だって、リョウの目に見える姿は私じゃないから。

だいたい“じゅん”ってなに？

それが本当の一人の人物じゃないって、“あの人”がいちばんわかってるじゃん。

“じゅん”て名前も、男の子たちの抵抗にあって、妥協案的に作った名前じゃん。

男でも女でもない、男でも女でもどっちでもいい総称。

私は違う、私はちゃんと、ずっとずっと前から“あかり”だったよ。

リョウは私の大切な存在なのに、なんで“じゅん”が勝手に会うことにしてるの？

“じゅん”に会ったら、リョウはそれが私だと思っちゃうよ。

もしもリョウに会うのなら、私は私のこの姿で会いたい。

でもそれは絶対にムリだから、私はリョウに会いたくない。

なのに、なんでこの二人は私のことで言い争ってるの？

私のことなのに、なんで二人が決めるのよ！

「だから、彼が私のことを見たら、現実をわかってあきらめるのよ」

「なんで君が高校生のガキと会わなきゃならないんだよ！

そんなもの放っとけばいいだろ！ 本当は君が会いたいんじゃないのか！」

このおっさん、バカじゃないの？

私たちのこと理解してるつもりで、全然わかってないくせに。

若い頃は、その目の前の人に恋をして結婚したくせに、

今では、自分が理解できないことや手に余ることが起きると怒鳴るだけ。

歳ばかり食って、中身はガキだよ、高校生よりずっとガキ。

「とにかく俺は許さないからな！ そんな得体の知れないガキと会うなんて！」

ハアッ？ なんであんたに決定権があるのよ！

リョウと会うとか会わないとか、決める権利があるのは私だけだよ！

「私行く！」

行く気なんかなかったけど、このおっさんにアタマきたから！

「なに言ってるんだ!？」

「あんたが止めたって、私は行くから！ 私の人生なんだから私が決める！」

「な・・・ あかりに代わったのか？」

「なにそれっ!? 私は私だよ! 代わったってなに? 私はずーっと私なの！」

「わけのわからないこと言うな！」

ほら、怒鳴った。

だから、男って嫌い。このおっさん、大嫌い!

「勝手にしろ! 離婚だ! 離婚！」

「べつにいいけど？」

私はあんたと結婚してないし。

会いたくないと思ってたけど、40歳の入れ物に閉じ込められたまま会うなんて、

そう思ってたけど、リョウなら・・・ その中の私を見つけてくれるかな?

でも、会ったからって、結末はわかってる。

多分“じゅん”はリョウのことを好きにはならないよ、てか、今だってなんとも思ってない。

この家を一步出たら、表に出られるのは“じゅん”だけだから。

きっと、リョウと会っても・・・

それに、“じゅん”が、あのメールを送った瞬間から、

私はリョウにとって、16歳のあかりじゃなくなった。

もう前みたいに私のままでリョウと話すことなんかできない。

きっといつも“じゅん”が傍にいるんだよ、父兄同伴みたいに。

二日経ってもリョウから連絡がない。

バイトのシフト代わってもらって言ってたけど、代わってもらえないから?

『リョウ、全然連絡ないけど、何かあったの?』

『どうしてメールしてくれないの? 何かあったの?』

メールしても返信が来ない。

どうしたの? 何があったの?

電話しても、呼び出し音は鳴るけど出ない。

そうか・・・ そうだよな。

やっぱり40歳なんて受け止められないよね。

ビビったんだ、ていうか冷めたんだよ。

だったらハッキリ言ってよ!

『リョウ、メールしても電話しても何も言ってくれないのはなぜ？
私への気持ちが冷めたのなら、ハッキリ言って』

リョウも・・・ 結局ただの男だってことだよな。

あ、メール。

『今から電話する』

どういう気持ちなのか、リョウが何を思っているのか全然わからない。
ただ忙しかっただけ？ それとも・・・ なに？

電話が鳴った。

「もしもし」

まるで何年も電話してなかったような気持ちになってる。

「もしもし」

リョウの声は、いつもの声と違う・・・ どこがって言えないけど・・・

「リョウ、どうして全然連絡してくれなかったの？」

「いろいろ考えてた」

いろいろって・・・

「なに？」

「あかり、会うのはやめよう」

え？

「なんで？」

「会っても意味ないから」

意味がないって・・・ どういう・・・

「それって、私が本当は40だから？」

「そんなことは関係ない」

私は・・・ いつもの私とリョウの空気に戻りたくて・・・

明るい私で・・・

「せっかくなんだから会おうよ！」

「いや、会わない方がいい」

なんで？ どうして急に・・・

私は“40歳”のふりして、おどけて言った。

「会わないと後悔するかもよお？ 私、すごくいい女だよお？」

「わかってるよ！ わかってるから会いたくないんだよ！」

え？

「会ったら・・・ 会ったら、俺は絶対あかりを離したくなくなる」

そんなこと言われると思わなかったから・・・

「離さなきゃいいじゃん」

できないとわかってるのに・・・

そうなったら困ることを知ってるのに・・・

なに言ってるの私？

「あかり、俺は、こいつだって決めたら、その女だけを愛する、その女だけしか見ない。

その女だけを一生かけて絶対にしあわせにしたいって思う。

でもさ、この前あかりが言っただろ？ 俺たちに先はないって」

だって本当にそうだから・・・

「あかりがそう思ってるなら、別れた方がいい、俺はあかりの遊び相手じゃないよ」

「遊び相手だなんて思ってないよ！」

「先がないなら、そういうことだろ」

言葉が出てこないよ・・・ 遊びなんかじゃない・・・

だけど、リョウから見たら・・・ 40歳の人妻が遊びでメル友してるって・・・

あかりじゃなくて、もう・・・ “じゅん”しか見えないんだね・・・

「それじゃ」

電話が切れて、私は、何も感じていない。

だって、あんまりバカバカしくて、何を感じればいいのか？

リョウにはもう私が見えないんだね。

“40歳”という言葉の呪文で、リョウは私のことがもう見えなくなったんだね。

だから、あのメールで、“じゅん”が送ったメールで終わりにすればよかったじゃん。

そうしたら、傷つかなくて済んだ、私もリョウも。

私はあかりのままでいたかったのに、パンドラの箱を開けたのはリョウだよ。

結婚しよう？ 40歳の女と？ 17歳の高校生が？

それこそ先なんかないよ。

今さら何言ってるの？

どっちにしたって先はないんだよ！

結末は始まったときから決まっていたんだよ！

いつかは来る結末を、その結末が来るのを早くしてしまったのはリョウだよ！

リョウが会いたいなんて言わなかったら、私はあかりのままでいられたのに！

私のせいみたいなこと言わないでよ！

リョウの中のあかりを殺したのは、リョウ、あんただよ！

すべてを台無しにしたのはリョウだよ！

あかり-最後の電話

あれから三日が過ぎて、もちろんリョウからはメールも電話もない。
私からもしていない。

あれで終わり？

あんなにあっけない終わり方？

リョウはもう私のことは吹っ切って、新しいメル友ができたのかな・・・

そんなものだったの？

私の存在って、そんなもの？

そうだよ、会ったこともないメル友なんて、イヤになったら自然消滅・・・

ねえ、私はひとり人間じゃないの？

何かの部品？

私を感じたり考えたりすることは「無い」の？

これはウソ？ 今こうして感じているスタックしたような感覚は私のものじゃないの？

私を感じてることや考えてることは誰かのものなの？

私は感じてないの？ 考えてないの？

私はウソなの？

存在しないの？

私はいるよ！

ここに！

生きてるよ！

生きて、リョウのことが恋しくて、でももう終わりだってわかってて、

どうすることもできないこの気持ちを持って余してて、それが重たくて、

あんな終わり方されて、私はリョウみたいにスパッと割り切れないよ。

結末はわかってるけど、だけど、こんな終わり方、ひどいよ！

リョウ、そんなの自分勝手だよ。

私だって感情があるんだよ、リョウのピッチの中にいるわけじゃないんだよ。

いらなくなったら速攻で削除？

私の番号は消えても、私は消えないよ、ここにいるよ。

ちゃんと、サヨナラしたい。

私の物語は私の手でピリオドを打ちたい。

『リョウ、私とはもう話したくないかもしれないけど、
ちゃんとサヨナラしたい-あかり』

5分経っても10分経っても返信は来なかった。
もう無理なのかなって思った頃、返信が来た。

『今夜9時に電話して』

その文字を見ても、リョウが何を考えているのかわからない。

『ちゃんと出てくれる？』

『出るよ』

それがリョウとの最後の電話になるんだね。
あんなに楽しかった電話でのおしゃべりが、ウソだったみたいな気さえしてる。
なかったのかもしれない、私がリョウの中で「無かった」ことになったみたいに。
あれは私の記憶？ それとも誰かの記憶？
どうでもいい、どうせ終わりなんだから。

リビングのソファに座った。
ここがいちばん電波が届くから。
最後の電話で電波が切れたらイヤだから。
リビングには私しかいない。
私が何をしようとしているのか、多分みんな知ってるから。

ピッチを手にとったけど、リョウの声が聞けるけど、でも、これが最後なんだよ。

ピッ

呼び出し音が・・・ 一回、二回、三回・・・

「もしもし」

リョウの声の後ろから・・・
曲が聞こえる・・・ いつもは電話するときは何もかけてないのに・・・

その曲は・・・ やっぱり、それだと思った・・・

リョウが私と一緒に聴きたいって言った曲は、やっぱりそれだったんだね。

「もしもし」

何を言っているのかわからなくて・・・

リョウも無言で・・・

受話器からはあの曲だけが聞こえる・・・

リョウが私のために、この曲をかけたってわかってるよ。

言わないけどね、言わなくても私がわかるって、リョウはわかってるから。

言葉が出てこない・・・

受話器の向こうにリョウがいる・・・ まだ今は・・・

「あかり」

「なに？」

「黙ってるからさ」

「だって、何を言っているかわかんないんだもん」

明るくそう言ったけど、本当に何を言っているかわからない。

“サヨナラ”を言うしかないってわかってるけど。

「あかりと出会えてよかったと思ってるよ」

少しずつ別れの言葉に近づいていくんだね・・・

「リョウと一緒に時間は・・・ しあわせだったよ」

私も過去形で・・・

「・・・俺もだよ」

だったらなぜ・・・ そんなこと聞いてもしかたないってわかってる・・・

「リョウ、私のこと、忘れないでくれる？ ほんの少しでも」

「俺はあかりのことは全部忘れる」

リョウらしいね。

「言っただろ、俺は一人の女をずっと愛し続けるって。

今度誰かと出会ったら、そいつだけを愛していく、あかりのことは忘れる」

「うん」

「あかりも俺のことは忘れろよ」

「そうして欲しいの？」

「そうして欲しい」

「リョウがそうして欲しいなら、そうする」

「そうしろ」

「うん」

それができるならきっと楽だよな。

「リョウ・・・ 最後に・・・ 聞きたいことがあるの」

たとえ・・・ あなたが・・・

「なに？」

言ってくれないとしても、それでも・・・

「私のこと、愛してる？」

「愛してるよ」

何の躊躇もなく、ゆっくりと言ったその声は、私を包み込むほどの愛が詰まっていて・・・

抑えてた思いがドッと噴き出して・・・

あなたの声で、愛してるって言われたのは初めてで・・・

「お願い、もう一回言って！」

「愛してるよ」

「もう一回言って！」

「愛してるよ」

「もう一回言って！」

「愛してるよ」

「もう一回・・・」

「愛してるよ」

リョウの「愛してる」は、ひとつひとつ全部違って、

本当に私のことを愛してるって、今も愛してるって・・・

「もう一回言って！」

「愛してるよ」

リョウ、私、今わかったよ。

あなたが、私をからかったりイジワル言ったりしてた言葉はすべて・・・
すべて「愛してる」って意味だったんだって。

「もう一回言って！」

「愛してるよ」

一生分の「愛してる」を言って！

あなたの「愛してる」を！

「リョウ！ 愛してるって言って！」

「愛してるよ」

リョウの声も涙声になっていた。

「もう一回・・・」

「愛してるよ」

「もう一回・・・」

「あかり・・・ 愛してるよ」

きっとこの人は、私が「もう一回言って」って頼み続ける限り、言い続ける。

「愛してる」って、何度も何度も・・・

私からやめない限りずっと・・・

リョウ・・・ 私はあなたにこんなに愛されていたんだね。

「リョウ・・・ ありがとう」

こんなに愛してくれてありがとう。

「あかり、元気にいるんだぞ」

それは・・・

最初にリョウが電話してきたときの、後ろから抱きしめられたような感覚で・・・

あのときから・・・ ずっと・・・

あなたは私のことをずっと後ろから抱きしめていてくれたんだね。

だから・・・

「リョウ・・・ さようなら」

「あかり、さようなら」

リョウは私が切るまで切らないでくれた。

だから、私から切った。

ピッチを床に放って、私は泣いた。

ずっとずっと、きつともう二度と止まらないほど・・・

止まらないよ・・・ 涙・・・ ずっと・・・

“私”は、頬の涙をティッシュで拭いて、床のピッチを拾い上げた。

彼がリビングのドアから顔を覗かせた。

「今あかりが自分でケジメをつけたところ」

「俺、聞いてるだけでもせつなかった」

それを望んだのはあんたでしょ。

「あんなふうにされたら、男はたまらないよ」

終わったのよ。

「だから言ったでしょ？ あかりもまりも、自分でピリオド打つって。

16歳の女の子としてやりたいことをさせてあげれば、それで終わるって。

物語みたいなものだって」

物語には必ず終わりがある。

あかりもまりも知っていた。

だから、自由に生きたかった、16歳の女の子がすることをしたかった。

本気で恋をしたかった。

それをさせてあげなければ、抑圧したら暴発するから、

私は二人を自由にさせていた。

それぞれが、ひとりの人間として存在する。

「各人格」なんて、一人の人間に言わないのに、

あの子たちは、そう呼ばれてしまう。

あかりが聴いている、あの曲を、リョウがかけていた、
あかりと一緒に聴きたかった・・・
GLAYの「Winter, again」を。
その曲を、あかりはこの肉体が滅びるまで忘れない。
そして・・・ リョウもね。

あかりもリョウの心に刻印をつけた。
まりのように意図的ではなかったけれど。
たとえ口でなんと言おうと、リョウはあの曲を聞くたびに思い出す。
あかりを、16歳のあかりを。
あかりは確かに存在していたという刻印は、リョウの心にも刻まれた。

17年

V6のライブなんて初めて見る。

TVだけどね。

結成20周年か、みんなおじさんになってるけど、

同い年のおじさんたちより断然若いよねえ。

ファンてわけじゃなかったけど、ほとんどの曲は知ってる。

あ、ゴウくん。

もうすっかりオトナになっちゃって。

笑い声が聞きたい

「タックン、紐かじらないの！」

上目使いで私のこと見てるけど、ダメなものはダメ！

「なに？ 今度は抱っこしろって？ もう、うるさいなあ、TV観てるの！」

濡れた鼻をグイグイすり寄せて、この甘えん坊！

「ペーくんは、もっとおとなだったよ、少しは見習いなさい」

無理だけどね、ペーくんはもう3年前に老衰で・・・

笑い声が聞きたい

突然、涙があふれて、クッション抱えて泣き出した。

私じゃない、これは・・・

笑い声が聞きたい・・・

もう二度と聞けないのはわかってるけど・・・

別れたからじゃなくて・・・

17年の年月は、リョウをおとなにしたから。

17歳のリョウはもうどこにもいない。

私は勝った

私は勝った、17年経った今、ヒロはもう34歳。

でも、ヒロの中の私は今も16歳のまま。

そして、私は今も16歳のまま。

あれから・・・ ヒロはきっと恋をして、何回も恋をして、結婚してるかもしれない。

子どももいるかもしれない。

ヒロの時計は絶対に巻き戻せない。

でも、あの曲を聴くたびに、私のことを思い出してる。

17歳だった自分が恋したマリを。

二度と若かった自分に戻れないのはヒロ。

これからも、けして消えないマリの刻印を抱えながら年をとっていく。

憶えているかな？ 憶えてるよね

リョウは、あのとき、私のことは全部忘れるって言ったけど、

あの言葉は、絶対に忘れられないって意味だって、今ならわかる。

冷たい風にさらされた 愛は二度と動けないと

リョウの中の私への愛は、あのときそのまま、リョウの心の片隅で凍ったままで動かない。

あの曲を耳にするたび、凍った記憶がうずくでしょ？

リョウの時間は進んでも、それだけはあのときのまま。

きっと、あれから燃えるような恋をしたらうね。

そして、一生かけて絶対にしあわせにしたいって人と巡り合ったかもしれない。

でも・・・

私は私は、わかってるわかってる。

この身体の中にいたから、17年間いたから、

燃えるような恋は いつかは 現実の風の中で 消えていく。

34歳の日常だけがある。

温かくて平穏な日常。

恋をした相手は、もう「家族」に形を変えて、

燃え盛っていた炎は、時間の流れの中で熾火になって、

日々の温もりに、あたりまえの温もりになっていくだけ。

あなたは年をとっていく、これからもずっと。

でも私はずっと16歳のまま。

あの曲を聴いて、私のことを思い出しても、過去の恋の物語として思い出しても・・・

あなたは知らない。

私が今も16歳だってことを。

あなたには言わなかった。

本当の私が何なのか。

私は永遠に年をとらないんだよ、この身体という入れ物が滅びるまでね。

あなたは知らない。

「あなたのマリ」が「あなたのあかり」が、今もあのときのまま生きてることを。

まりとあかりが微笑んでいる。

あの頃は、この身体の中にいることが死ぬほど辛くて苦しくて・・・

この身体から抜け出して、一人の人間として自由に生きたいともがいていたけれど。

今は、この身体の中にいるから、ずっと16歳のままでいられることを、

老いていくしかできないふつうの人間が願ったとしてもけして叶わない、

「止まった時間」の中にいられることが、私にはできるってことが・・・

今の彼に会いたい？

そう問いかけた“私”に、

まりは・・・

「私はやりたいことをやったから」

あかりは・・・

「中年のおっさんに興味ない、おっさんなんて大嫌い」

そう言って笑った。

“私”は・・・

ヒロとリョウ、ありがとう。

あなたたちは、まりとあかりが本当に存在してるって、

それぞれが一人の人間だって、まりとあかりに感じさせてくれた。

まりとあかりが本当に生きているって、証を残させてくれた。

あなたたちの心の片隅の刻印で・・・。

この17年で、ピッチから携帯、そしてスマホへと変わっていったけれど、

ヒロとリョウ、あなたの中のピッチには、今もまりとあかりがいる。

ずっとね、心の中のポケットの中に・・・。

FIN.

(c) 作詞：TAKURO “Winter again”

この物語は、解離性同一性障害を抱えた一人の人間の中の、
16歳の二人の「人格」たちの物語。

TVや本で扱われている解離性同一性障害は、最重度の症例である。
世間に知られているのは、数か月も記憶がないとか、
それぞれの人格たちが、お互いの存在を知らないの、日常生活が送れないといった、
かなり深刻な状態のものばかりだ。
しかし、他の病気にもレベルがあると同様に、解離性同一性障害にもレベルがある。
(解離性同一性障害を“病気”というカテゴリーに入れてしまうのは早計であるが)

ミックスジュースに例えてみよう。

「健常」な人は、リンゴなバナナやミカンを入れ、スイッチを押して、
すべてが完全にブレンドされた状態。
りんごやバナナやミカンの風味は感じるけれど、それらがひとつの味となっている。
「最重度」の場合、水の中に切った果物を入れたまま。
それらは交わることがない、リンゴはリンゴで、バナナはバナナのまま。
そして、もうひとつのレベルは、水に果物を入れて、ちょっとスイッチを押す。
混ぜられている部分もあるが、そのままの状態の部分もある。
(ここにもレベルがある)

今回の物語は、健常と最重度の間のレベルの解離性同一性障害。
各人格が記憶を共有しあえるレベル。
最重度とは違い、数か月も記憶がないということはないので(数分はある)、
逆に、自分が解離性同一性障害であると自覚しにくい。
私は過去、そういう人たち数人の話を聞いた。
各人格が記憶を共有しあってるがゆえに、逆に辛いことも多いという。
「わがままだ」「コロコロと気分が変わる」「さっき言ったことと逆のことを言う」
そうやって、まわりの人たちに責められ続けていたと。

解離性同一性障害に関する本はたくさんある。
専門医が書いたもの、障害をもっている本人が書いたもの、
どれもが解離性同一性障害の状態や治療過程などを扱ったものがほとんどだ。

私は、「各人格」と呼ばれている人格たちが、ただの「化け物」や「症状」ではなく、
一人の人間として、それぞれ個性を持ち、感情を持ち、考える姿を描きたかった。

何がなにやらとしか思えないかもしれない。
ただの高校生の恋物語としか思えないかもしれない。
これがけして万人向けではないことはわかっている。

ただ・・・

私は、この中の「まり」や「あかり」のような子たちを抱えている人、
最重度ではないけれど、けしてまわりには理解されない辛さを抱えている人、
それがもし、たった一人だとしたら、その人のために書いた。

あなたはひとりじゃないよ。
あなただけじゃないよ。
それはけしてネガなことばかりではなくて、あなたでしかありえないことだってあるよ。

あなたのために書いたよ。

Dec. 22 2015